

Title	『氏族大全』版本考
Sub Title	Comparative study of the printed edition of the Shi zu da quan
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2005
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.40 (2005.) ,p.269- 332
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20050000-0269

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『氏族大全』 版本考

住 吉 朋 彦

尚古の思想を維持して来た近世以前の漢学者は、先人の事蹟に通ずることを習いとし、典籍に親しみ、史上に伝えられる勝

事に深い共感を寄せていたが、そのような知識はいわゆる故事として凝縮され、読書人の間に共有されたことから、これを踏まえて識者の間にのみ通用する表現が生み出され、ややもすると故事に通じていることそのものが問われる事態をも派生した。その結果、經史子集の一次的な著述に取材し、故事を集成して検閲に備えるための編者が成されるようになったが、そうした編集への欲求は、中国で出版事業の成熟した宋末以降、坊刻本という媒体を得て、書林と読者との間に相互に高められ、次第に勢いを増して数多くの編著が刊出された。本稿に取り上げる

『氏族大全』は、そのような気風の横溢した元の世に、通俗の参考書として坊間に編集された書物である。

後に見るように『氏族大全』の基本構造は、特定の人名に関わる故事を簡潔な章段に纏め、主体となる人名の姓氏によってこれを分類し、姓氏の文字の韻によって排列したもので、每章その要句を抽出して題目に掲げ、主要の姓名「何某」より本文を書き起こした体裁である。さらに細かく見ると、章段を括る姓字の標出に際し、文字の声類と氏族の貫籍、出自に関する細注を伴う他、每姓本章に続き「女徳婚姻」の節を設け、特に婚姻に纏わる故事を集めている。後者に関しては『四庫提要』卷一百三十六、子部類書類二に、本書を解題し「蓋宋元之間、婚

禮必有四六書啓、故載之獨詳、亦以便於刪接也」と説明しているように、婚礼の書啓に用いるための参考記事であるらしい。

また毎姓の首尾に（版本によって異なる）、その文字を含む熟字を列挙し附記してあるのは、『提要』には「至每聲末間附韻藻數語、如洪韻靡洪涵洪、翁韻仙翁塞翁之類、既與氏族不相關涉、且掛漏無取、徒滋蛇足」と酷評しているが、このような韻藻を存することは、本書が作文の用に応える書物として編集されたことを示している。従来、本書を書目に列し録する際、氏族の来歴と故事を集めた書物と解し、内容に従って史部伝記類に掲げる立場と、数ある作文の参考書の中で人名に纏わる故事のみに特化した編集と判じ、機能に従って子部類書類に掲げる立場との、両様に分かれているが、編者の期待する受容をも考慮に入れると、本書の場合は後者の処置に分があるかと思われる。

本書の編者の名は既に佚し、今日では全く伝わらない。その編集の時期については、『四庫提要』に「不著撰人名氏。書中所引事蹟、迄於南宋季年、蓋元人所編次」とある説が定着しており、陸心源の『儀顧堂統跋』巻十一にも本書を録して「癸集末夾谷姓下、注曰大金支裔、其爲元人所撰無疑」と指摘し、元

人の撰に成ることを示している。本書の記事を見ると、より端的には己集（巻六）の首、上声一董韻の「孔」氏の項に「先聖世系」を説き「孔子名丘（中略）大元加諡大成至聖文宣王」と記して「大元」の文字を含み、元泰定元年（一三二四）麻沙呉氏友于堂刊行の『新編事文類聚翰墨全書』丙集巻十三至十九の七巻が、ほとんど本書の剽窃であるのを見ると、本書の編集が元の世に成ったことを示して明らかであろう。

この『氏族大全』がこれまでに、どのような書物としてどの程度受け容れられて来たかという点につき、本稿では版種と伝本の研究に基づいてこれを明らかにしようというのであるが、予め若干の見通しを述べておくと、中国大陸に於ける版本の伝流という意味から言えば、滔々たる受容の広がりがあったとは言い難い。明代の官庫には『文淵閣書目』巻十二、昃字號第一厨書目「姓氏」条に「氏族大全（一部二冊闕）」「氏族大全（一部四冊闕）」と見え、既に不完全の収蔵であり、明末私家の蔵書目にも本書の名を散見するが、必読の書として一般に普及したとは見られない。こうした著録の状況については、元來本書が坊間に出た通俗の書であること、そして實際上、本文に故障の多いことなどにその原因があると思われる、例えば明の葉盛の

近代雜書著述考據多不精（中略）所謂氏族大全尤甚。湯公讓指揮以博學強記自許。一日劉草窗家偶及趙明誠、湯以爲趙抃之子。予偶記抃之子出岢、岢。明誠則宰相挺之子也。

湯大以爲不然。徐元玉在座、亦不能決曰、明日當考書、負者作東道耳。湯退既詳考得實、乃攜氏族大全叫呼而來曰、本子誤我矣。近考廣州十賢、李朝隱一作李尚隱、因訛而爲李商隱、亦出氏族大全云。

とあり、偶々劉溥（号草窓）の家に集った葉氏と、博学を自認する湯胤勣（字公讓）や徐有貞（字元玉）等が、宋の趙明誠の世系について議論になり、負けた者が客を請う賭けとなったが、『氏族大全』の誤伝がもとで、湯氏が窮地に陥ったという話を載せている。實際本書庚集（巻七）上声二十九篠韻の「琴鶴清風」章を見ると「趙抃、字閱道。氣貌清逸、人不見其喜愠、自號知非子（中略）位至參政、年七十七薨。諡清獻公、二子、岢、明誠」とあって、湯氏弁解の如くであるが、²ともかくも『水東日記』の記事は、明代中葉に於ける本書の一定の流布と、必ずしも芳しからざる評価を伝えており、後に『四庫提要』が『水東日記』を引き、さらに例証を加えて

今考、中間所列朝代先後、多顛倒失次。如王導妾雷氏干預政事、陳之張貴妃、龔孔二嬪、怙寵亡國、而並入之女德、則深爲不倫。又如韋思廉劉奉林諸人、既別立仙之一目、而張果姜識諸人、亦以仙術顯名、乃仍混入人物之中、無所區別、體例亦殊疎舛。

と、本書の見識や編集上の不備をも非難しながら

特摺撫尚爲廣博、有其人爲史傳志乘所不詳、而獨見於此者、頗足以資旁證。至於王氏有臨沂太原二派、勾氏避宋高宗諱分作數姓、蘭亭會詩名氏諸本之不同、亦間附考訂。寸有所長、固未嘗無裨於藝苑也。

と、考証に資益する点を拾って「寸有所長」と評価しているのは³比較的公平と言えようか。これを要するに、本書は明清の間に、伝本こそ絶たなかつたものの、一般に信を得て常に繙かれる書物であつたとは見られず、どちらかと言えばその勢力は微弱であつたかと思われる。⁴そうであるのに、わざわざ本書を取り上げ、その版本につき考証整理しようと試みる所以は、専ら本邦中近世期に於ける頻用に注目するからである。

わが国に於ける『氏族大全』の普及については、先ず伝本の如何に拠つて見るべきであり、その点は後章に詳述したいが、

本書は南北朝期以降に受容の跡が見られ、当初は主として五山

禅林に於いて学ばれた書物であったと推される。本書の受容に

ついて、早く芳賀幸四郎氏の著作中に言及があり、五山僧の作っ

た日録、抄物や文集中に本書の名が上がっている例を拾遺され

た。^⑤またそれ以上に本書の受容が頻繁で細やかであったことを

示しているのは、わが国室町期以降流通の様々の版本に見える、

参考増補のための注記書入の様子であり、屢々「排韻云」と称

して本書の引用が甚しい。一例を挙げれば、『韻府群玉』元元

統二年刊行の成算堂文庫蔵本、同「南北朝」刊行の熊本県立図

書館蔵本、『新增説文韻府群玉』元至正十六年刊本の三井高堅

旧蔵本、大谷大学図書館蔵本等、『韻府群玉』の諸本中には、

欄上や行間、貼紙の上に、本書の引文補注や校字の結果を附記

して互注する伝本を数多く存する。韻事の実践について用途の

広がった『韻府群玉』と共に、本書が参照されている実相に鑑

みると、本書は五山禅僧の学問の現場に於いて座右に置かれ繕

かれていたことがわかる。そのことと揆を一にして、本書には

わが国独自の複製が三度にも涉って行われており、その本文形

成の様子を含め、わが国の中近世期に行われた学問がどのよう

な版本情況に拠って成立していたかを、伝本に従い確かめてお

くことにも一定の必要があろう。

新編排韻増廣事類氏族大全十集

元闕名編

〔元〕刊 十六行本

本書の版本は一系統を基礎とし、本版はその根源に最も近い位置を占めているが、後続の版種中、本版の覆刻本が広く流布し、本邦刊出の本はこの部類に属する。また直接間接の翻刻本も数種見出され、諸本の概要を成している（図版一、二参照）。

先ず綱目（一一張）、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」、

次行線黒魚尾下に一格を低し集目、直下に小字にて声目を附し、

次行低三格に韻目を標し（墨閉陰刻）、次行より姓氏を列す。毎行十

段、毎韻改行して癸集、覆姓の夾谷氏に至る。十行十六字格、

末行下辺花魚尾下題「氏族大全綱目（畢）」。

巻首題「新編排韻増廣事類氏族大全（隔五格）甲（至癸）集

（墨閉陰刻）」、次行「一東（墨閉陰刻）」等韻目、次行一格を低して

「馮（墨閉陰刻）へ宮音 始平」等と姓氏及び声類、貫籍を標し、

同行下に附注（小字）、「能斷」等と章目を標し、

次行より「馮簡子」以下本文。記事の末に「左襄三十二年(小)」等と引書目を附す(間々欠く)。また行を接し、低三格「女徳婚姻(墨閉)」と標して、さらに章日本文を附す。また同姓の末尾には章目を置かず圈発下に簡略の伝を列す。末行下さらに圈発を打つて韻藻を列す。屢々毎姓改張。全編左の如し。なお本書は、姓氏を含まない韻については韻目を掲載しない。

甲集(一―二十九之三十一―五十七、計五六張)

(上平声) 一東・馮― 十虞・爰

乙集(四八張)

十二齊・齊―二十七刪・環

丙集(四二張) (下平声)

一先・田― 九麻・余

丁集(五二張)

十陽・陽― 羌

戊集(一―卅七之三十八―五十一、計五〇張)

十二庚・程―二十七咸・凡

己集(四二張) (上声)

一董・孔― 九麌・郎

庚集(四〇張)

十一齊・禰―五十三謙・湛

辛集(一―四十至四十一―五十七、計五六張)

(去声) 一送・貢―五十四闕・念

壬集(三八張) (入声)

一屋・陸―三十二洽・邾

癸集(一五張) (覆姓)

上平・公孫― 入声・夾谷

左右双辺(一八・七×二・〇糧)有界、每半張十六行、行二十八字。線黒口、双黒魚尾(不對向)、上尾下集目、間々大小字数を附し(或は下象鼻)、下尾下張数。巻尾題「甲集終」等、大尾題「新編排韻增廣事類氏族大全終(行跨)」。

この版本は、数字による巻立を採らず十千の集目を標する。

また姓氏等の附注を除き同一の字格を以て構成され、每章の區別は改行によって示される。本文中に墨釘や空格を存し、乙集第九張前半第五行(以下「乙9前5」等と略記)に「崔颯子八人瑄瑒瑒瑒瑒球■世以擬漢荀氏八龍」(實際の墨釘は連属、以下同)と、丙4後13に「邊肅(中略)李奉天/□□比唐修文館字士好事者號爲二十四氣」と、丙12前1に「姚鏞(中略)未幾果以□帥臣被劾」と、丙12前3に「姚勉字□号雪坡」と、丙39後14に「過■仕宋爲秘丞宰剡縣」と、戊6前8に「明山賓(中略)帝命裁成大典(中略)嘉礼則□□又沈約徐勉等參評」と、戊14後8に「滕宗諒(中略)邵■篆号四絶」と、辛31後12「侍」、辛51前9「氏」等とあるが、囑目の版本を見る限り、どの本に拠ってもこれらの箇所正文を得ない(辛集の二例は空格が正)。右の故障が多く姓名称号の所に生じているのを見ると、これらは書承や翻刻の問題ではなく、

稿本に不明の文字であった可能性がある。

〈早稲田大学図書館 又八・二六〇三〉

五冊

後補古標色表紙(二一・八×一四・三種)左肩題簽剥落痕、首冊のみ打付に「新編排韻 共五」と書す。毎冊後表紙中央打付に「五冊全」と書す。改糸。天地截断、裏打修補。綱目の後、本文に入る。丙至戊集、辛集を各一冊とする他は毎冊二集(每声一冊)。

室町期と見られる朱筆を以て標批圈、豎批句点、行間校改校注、稀に返点、連符、音訓送仮名を加え、別手墨筆にて欄外校注並に本文鈔補を施し(巻首章目の墨罫は鈔補)、又欄上に別手の室町期の朱墨を以て補注を加う。毎冊首に不明墨印影を存す。

この本の甲集第二至七張に、前後とは著しく字様の異なる版本を配してある。また料紙も異なるか見え、別本の補配かと思われるが、この部分に同版の本を確認することが出来ない。単に補刻である可能性を含め、なお後時の考証に期する。

〈台北・国家図書館 北平図書館旧蔵書(Microfilm)〉 一冊

存己至庚集 明晋王府旧蔵

存二集。表紙書影を得ず。裏打修補。一冊二集。摺印の情況は判然としないが、しばしば版面の破損が認められ、上々とは見られない模様である。

首に单边方形陽刻「晉府／書畫／之印」朱印影(明晋王府所用)、首尾に「國立北／平圖書／館所藏」朱印影を存す。

王重民氏「中国善本書提要補編」子部類書類並に阿部隆一氏『中国訪書志』(昭和五十一年、汲古書院、同五十八年増訂)三五一頁著録。

同

「元末」刊「明修」覆「元」刊十六行本

この版本は前出十六行本の覆刻と認められるが、綱目の款式は底本に異なっている。

先ず綱目(六張)、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」、次行花口魚尾圈発下に二格を低し「甲集(上平声)」等と、又次行に韻目を標し、直下より姓氏を列す。毎韻改行、癸集の覆姓入声夾谷氏に至る。

卷首題「新編排韻増廣事類氏族大全(隔五) 甲集(至癸集(刻)」、

次行「一東(墨開)」等と韻目を標し、次行低一格「馮(墨開)」(宮音 始平)等と姓氏及び声類貫籍を標し同行下に附注(小字、双行)、次行低五格「能斷」等と章目を標し、次行より姓名「馮簡子」

以下の本文、末尾に「左襄三十年」等と引書目を附す(間々欠く)。每章改行。又行を接し、低一格「女德婚姻(墨開)」と標して、さらに章日本文を附す。又同姓の末尾には章目を置かず、圈発下に簡略の伝を列す。

左右双辺(一八・三×一二・一糶)有界、每半張十六行、每行二十八字。小黒口、双黒魚尾(不對)、上尾下「甲」等集目、下尾下張数。卷尾題「某集終」、大尾題「新編排韻増廣事類氏族大全終(行)」。

本版の款式は底本に同じ、左記の伝本に見る限り、本文採用の文字は「為」「漢」等と、簡体に従う度合が高くなっている。ただ現存本には後修の痕跡があり、甲集第十三十六、廿九之三十、三十一一五、四四至四十五一六張以下の張子は匡郭四周双辺で磨滅が甚しく、「爲」字には簡体を用いない等、旧版の残存を示す特徴が認められる。この点につき、本来は同版未修本の伝存を前提としなければならないが、現在まで一本のみの著録しか得られないために、暫時右の如く明修と標記した。ま

た版式その他、卷首に取材しているが、これも修刻に係るかと推される。参考のために記して置くと、旧板と推される甲集第十三張の匡郭内径は一八・二×一二・一糶である。

台北・国家図書館 二〇五・一四〇三〇四一 一〇冊

清繆荃孫旧藏

新補香色表紙(二五・三×一五・七糶)、素絹包角、金鏤玉装。每冊前後各二葉の宣紙を副える。網目末尾の半張分は原紙を失い、新たに紙料を加え匡郭と界線のみ鈔補。甲集を二冊に分かち壬至癸集を一冊に収める他は每冊一卷。

朱筆にて句点句圈批点批圈を加え、又別手の朱筆にて句点整点を、墨筆にて本文校改、行間欄上に補注を施し、欄上に標点を、破損部に鈔補を加う。首に单边方形陽刻「如／錦」朱印影、卷首に同「古／愚」、单边槽凹形陽刻「冰香樓」朱印影、卷首及び第五、八冊首に方形陰刻「友年所見」朱印影、第一、十冊尾に单边方形陽刻「海昌／陳琰」「拾遺／補闕」、第三、九冊首に同「海昌／陳琰」(小)、同小判形「立炎」、第七冊首に同方形「陳立炎(書録)」朱印影、第十冊尾に同「菴斐軒」朱印影、首尾に同「古書流通處(書録)」朱印影、首に同「雲輪閣」、卷首に同

有界「荃孫」朱印影（以上二顆清繆奎孫所用）を存す。

該本巻首の書影を『国立中央図書館金元本図録』丙部・図一

一一に収める（書入や印影を抹消）他、二〇〇五年十一月現在、

国家図書館ウェブサイトの内「古籍影像検査系統」(<http://rarebook.ncl.edu.tw/book.cgi/>)にて閲覧できる。

同

「明初」刊 覆「元」刊十六行本

この版本も知見一例のみで、しかも残本のフィルムに拠っている。以下フィルムの閲覧によって得た特徴のみを記す。幸いに巻首を存するが、綱目の様子等、底本に合致する。

先ず綱目（一一張）、次行線黒魚尾下に一格を低し集目、次行三格を低して韻目を標し、次行より各一格を隔て姓氏を列す。

尾題「氏族大全綱目へ畢」

巻首、題下の集目まで九格を隔て、第三行、姓氏下双行注の末より下辺に達し連属する柱状の墨釘を存す。本文の字体は、初編の標目を「能断」に作る等、さらに簡略の度を増す、但し巻首「爲」字は繁体を残す。ごく僅かに文字の増減を認む。

单边有界、三魚尾、上間に集目、下間（向）に張数、屢々双魚尾（向）。

〈台北・国家図書館 北平図書館旧蔵書（Microfilm）〉 二冊

存甲至乙集

存二巻。表紙書影を得ず。裏打修補。毎冊一卷、綱目第一至三、乙集第三十五以下の張子を欠く。

毎冊首尾に单边方形陽刻「国立／北平圖書／館所藏」印影を存す。

前出王氏『補編』並に阿部志三六二頁著録。

右の他、『浙江図書館古籍善本書目』子部類書類（三三四頁）に「新編排韻增廣事類氏族大全十卷 元刻本 邵瑞彭跋／一冊／存三卷 〔甲・乙・丙三集〕／十六行二十八字 四周單邊白口」⁴²⁸と録する版本は、上記十六行本のいづれかに該当する可能性がある。

ここで本邦覆刻の十六行本について言及すべき順序であるが、行論の都合上、先ず元末明初の翻刻諸本について述べ、次で少しく年代を溯り、あらためて本邦の版刻に及ぶ。

新編排韻增廣事類氏族大全十卷

〔元末〕刊〔玉融書堂〕

二十行 翻〔元〕刊十六行本

本版の最大の特徴は全編を巻立とすることで、款式の上でも、題目以下編集上の目子を大字に、本文は小字双行の扱いとして、改行を少なく次々と追いついで行くと取って、これらは宋末から元明にかけて流行した、坊刻の韻書類書や詩字書類と同工の様式であり、版式字様もそれらと共通している（図版三至五参照）。

封面、双辺有界、上層（每字改行）玉融書堂、下層（中央界線上花卉形陰刻）排韻／増廣事類／氏族大全（書大）牌記。

先ず綱目（一四張）、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」、次行線黒魚尾圈発下に一格を低し巻数、次行二格を低し声目、次行低三格に韻目を標し、次行より低一格以下に声類（墨閉陰刻）、姓氏、貫籍（字小）を列す。毎行五段。巻十、覆姓の夾谷氏に至る。十行二十一字、尾題「氏族目錄（畢）」。

巻首題「新編排韻増廣事類氏族大全巻之一（至十）（大字跨行）」、次行線黒魚尾圈発下に一格を低し「一東（大字跨行）」等韻目、次行圈

発下低二格「馮（大字跨行）」等と姓氏を標し、同行下に附注（字小）、次で圈発下に韻藻（字小）を附し、次行「能斷（大字跨行）」等と章目を標し、直下より本文（字小）。記事の末に「左襄三十一年（字細）」等と引書目を附す（間々欠く）。毎姓「女徳婚姻（墨閉陰刻）」と標し記事を加え、末尾にはさらに簡略の諸章を列し、各圈発を以て隔す。毎姓改行。全編を十巻に分ち、左のような組織を有する。

第一卷（三四張）（上平声） 一東・馮 十虞・爰

第二卷（三〇張） 十二齊・齊 二十七刪・環

第三卷（二六張）（下平声） 一先・田 九麻・余

第四卷（三二張） 十陽・陽 一荒

第五卷（三二張） 十二庚・程 二十七咸・凡

第六卷（二五張）（上声） 一董・孔 九麌・鄔

第七卷（二五張） 十一齊・禰 五十三謙・湛

第八卷（三六張）（去声） 一送・貢 五十四闕・念

第九卷（二七張）（入声） 一屋・陸 三十二浴・郊

第十卷（一二張）（覆姓） 上平・公孫 入声・夾谷

四周双辺（二〇・三×二・四）有界、每半張二十行、毎行小二十七字、柳公權様式。中縫部小黒口、双線黒魚尾（向不对）上

尾下題「氏族幾」、下尾下張数。巻尾題「新編排韻増廣事類氏族大全卷之幾(大字)」(跨行)、大尾題「排韻事類氏族大全十巻終(大字)」(跨行)。本版は前掲十六行本の集目を廢し十巻とするが、実態は十集本の組織と同等で、本文内容はほぼ同じく、増刪も見当たらない。ただ第一巻、五支韻中「危」氏条に、十六行本の系統には宋の危横の小伝を存するが、本版にはこれを廢し、「危」氏に詳注を施して「望族。汝南。得姓姬周、始封洛陽王。後汧光之固始(中略)」朝議大夫臨川横、殿中侍御史樵、昭德、與今 中書參知政事臨川素、皆其裔。至諱五十八世、而洛陽固始武夷祖墓俱無虞、子孫皆有而江閩尤多焉」の長文を存することは独特である。また本版の刊行時期について、右氏族注中に、元末明初の大官であつた危素につき「中書參知政事」と記すのは、素の中書參知政事であつた至正二十至二十四年(一三六〇—四)間の著述と見られ、本版の刊行はそれ以降と見なされる。

該本所用の字体は、元末坊刻の常として簡略の省画体を混用するものである。しかし他の版本に照らし、「與」「爲」「漢」「遷」「號」「無」等、簡体を常用する文字についても屢々繁体を用い、巻首に於いては殊によく維持されている。また本版本文中に存する墨釘は、第二巻第六張前半第四行左(以下「二六

前4左」等と略記)「球■世」、三三後4右「■■■比」、三八前1右「以■/帥」、同「字■■号」、三二後4右「過■仕」、五4前7左「則■又」、五9前6右「邵■/篆」等であり、いずれも前掲十六行本以来の墨釘又は空格を引継いだもので、墨釘を増さなかつた代わりに、これを補うことも全く為されてない。つまり相補わず妄從する形であるから、両者は消極的繼承関係にあると見なされる。十集十六行本と十巻二十行本の先後を考えると、一見して前者が素朴の款式を有し、元来の形を保っているように思われ、標目を強調しつつ本文を追い込み、張数の少ない後者は、商業的により洗練された形であるように思われるが、これと同様に本文校改の労力も省かれたと言えようか。

ところで十集十六行本では、毎姓の字目に附注して姓字の声類と貫籍とを示してあるが、これを十巻二十行本では本文中に欠いており、首の綱目中、姓字の前後に附記し、まとめて示す形が採られていた。これら配置の異同は可逆的と考え得るが、声類を示す文字(宮商角徵羽の音名に仮託して声母の種類を指した附注)は、両者で著しく異なっている。今、上平声の一東、十虞韻の部分について表示し、両者を比較して見る。下段には

『通志』七音略と『古今韻會舉要』により、両書に於ける当該字の声母注記を掲げた。⁹⁾

(字目)(十六行本)(二十行本) (通志) (古今韻會舉要)

一東

通	東	蒙	豐	豐	宮	駿	終	种	翁	戎	洪	童	熊	馮	紅
商音	徵音			宮音	角音	角音	徵音	商音	商音	羽音	角音	徵音	宮音	宮音	宮音
徵	徵	宮	宮	宮	角	商	商	商	羽	商	羽	徵	羽	宮	宮音
徵	徵	羽	羽				商		宮	半商徵	宮			羽	羽音
徵次清音	徵次清音	宮次清音	次宮次清音	次宮次清音	角清音	商清音	次商清音	次商濁音	羽清音	半商徵音	羽濁音	徵濁音	羽濁音	次宮濁音	次宮濁音
烏	蒲	苻	苻	兪	于	吳	蘇	朱	盧	胡	虞	十虞	風	弓	融
羽音	角音	角音	宮音	角音	羽音	羽音	羽音	角音	商音	羽音	角音	十虞		羽音	宮音
羽	角	角	宮	角	羽	羽	羽	角	商	羽	角	角	宮	角	羽
宮	羽			半徵商	半徵商		商	商	半徵商	宮	角	羽	羽	角	半徵商
羽清音	徵濁音	次宮濁音	次宮濁音	羽次濁音	角次濁音	角次濁音	商次清音	次商清音	半徵商音	羽濁音	角次濁音	次宮清音	次宮清音	角清音	羽次濁音

塗	—	徵	—	徵濁音
塗	—	徵	—	徵濁音
須	—	角	商	角次清次音
瞿	—	角	—	角濁音
扶	—	宮	羽	次宮濁音
都	—	徵	徵	徵清音
爻	—	商	—	次商次濁次音

右の表を見ると、『古今韻会举要』の次宮、次商音を宮、商に含め、半商徵、半徵商音を商、徵と見なせば、まず一東韻に於いて、十六行本は『通志』にも『韻会举要』にも合わず、二十行本は常に『韻会举要』と同じ声類を注している。ところが十虞韻に於いては、十六行本は同様に無原則に注記するのに対し、二十行本は「虞」より「鳥」までを十六行本と同じに作り、同本に注記を欠く韻末の七字については『韻会举要』に従っている。これを要するに、本書元来の声類注記は無軌道に附されていたのを、二十行本刊刻時に本文中より除き、新たに綱目に正しい声類を注したが、改正を怠り十六行本に従う部分が残されたと思なされる。これを仮に二十行本から十六行本が出たと考えれば、わざわざ誤った注を本文中に移入したことになり、甚

だ不都合であって、款式の洗練、張数の縮少等の現象と揆をいにして、十六行本より二十行本が派生したものと考えられる。

なお本版の刊者として標出した玉融書堂の名は、後掲故宮博物院蔵本の封面に見えるのみであり、刊者に該当しない可能性を含んでいるが、この本が比較的早印であるなど、刊者に措定して不審がないため、当面通説に従った。玉融書堂は、該本刊出の他に事蹟を得ず、活動の跡をたどることが難しい。本版の版式字様を見る限り建安周辺の書肆と推測されるが、他に確証を得なかった。

〈台北・故宮博物院 楊氏觀海堂旧蔵書〉

六冊

清原家旧蔵 清原国賢 秀相手沢

後補古洪引表紙(二・六・一×一・五・七纏)左肩題簽を貼布して「氏族排韻(第幾)声目」と書し、右肩目錄題簽を貼布し卷数韻目を列記す。左下方打付に国賢の筆にて「青松」と書す。首冊のみ右下方綫外に「共六」と書す。天地截断、裏打修補。扉の位置に玉融書堂の封面、素紙印。首冊綱目、第二冊の首に楊氏影像を附し、本文に入る。每冊二卷¹⁰⁾。

朱筆にて豎、句点、間々返点、連符、音訓送仮名を加え、ごく

稀に欄上に朱墨の補注を施す。但し仄声では疎に遷る。末冊、後副葉に「雲州松江天神橋邊骨董家購之」の墨識あり。目首及び巻首に双边方形陽刻「清原」「秀／相」朱印影、毎冊首に单边方形陽刻不明朱印影（朱滅）、单边圭形陽刻「藍川家藏（楷書）」墨印影、巻首に同「楊印／守敬（楊守敬印）」、单边方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」、方形陰刻「宜都／楊氏藏／書記」、毎冊首に方形陰刻「飛青／閣臧／書印」朱印影（以上四顆楊守敬所用）を存す。

該本の目首及び巻首の書影を楊氏『留真譜』巻六に収める。また阿部志一一六頁に著録がある。

〈宮内庁書陵部 五五六・四七〉 四冊

後補古丹表紙（二五・五×一五・三種）左肩題簽を貼布し「氏族約（声目）」と書す。首冊のみ右肩打付に別筆にて「律（共四）」、右下方綫外に「共四冊」と書す。破損修補。綱目を存し本文に入る、毎声一冊、但し去、入声、覆姓を合す。やや後印。室町期朱豎批句点、標圈、室町期墨欄上校注を加う。毎冊首に单边鼎形陽刻「可／中」朱印影、单边方形陽刻「御府／圖書」朱印影を存す。

該本全巻の書影を線装の『日本宮内庁書陵部藏宋元版漢籍影印叢書』中に収めるが、分冊を変え、邦人の書人や印記は全て抹消されている。

〈台北・国家図書館 北平図書館旧藏書 (Microfilm)〉 二冊
存卷二至七

無文暗色表紙、左肩に題簽を貼布し「氏族大全（二）」等と書す。蝴蝶装。第一冊に第二至四巻、第二冊に第五至七巻を収む。やや後印。毎冊首尾に「國立北／平圖書／館所臧」印影を存す。

王氏『補編』子部類書類及び前出阿部志三五二頁著録。

右の他、「中国古籍善本書目」子部類書類に録する「新編排韻増廣事類氏族大全十巻（明刻本 明繆雲鳳跋）九六二五（南京図書館収蔵）」とは、同目稿本によると「十行十九字小字双行二十七字細黒口四周双边」の版式であり、本版または本版の覆刊に係る可能性がある。後考を期したい。

新編排韻増廣事類氏族大全十集

明永樂十七年（一四一九）刊（日新書堂）十七行本

翻「元」刊十六行本

これは前出十六行本の、毎行の字数はそのままに、半張の行数を増して張数の節約を図った版本である。従って積極的な本文の増刪や改修等はなく、十六行本の翻版と言って差支えない(図版六至八参照)。但し綱目には二十行本の体裁を逐う。

先ず綱目(一三張)、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」、次行線黒魚尾下に一格を低し集目、次行二格を低して声目を附し、次行低三格に韻目を標し、次行より声類(小字、墨開陰刻)、姓氏、貫籍(小字)を列す。毎行五段。卷十、覆姓夾谷氏に至る。十一行二十字、末行「氏族目錄」(畢)。

右の綱目尾題前に双辺有界「永樂己亥孟春／日新書堂新某」牌記を存す。

日新書堂は、元至正年間前後に活動した建安の書舗、劉錦文(字叔聞)日新堂の後裔と思われる。明代の刻書は嘉靖に至り、概そ弘治、正徳の間に活発である。¹³⁾

卷首題「新編排韻増廣事類氏族大全(隔五格) 甲(至癸) 集(墨開陰刻)」、次行「一東(墨開陰刻)」等韻目、次行一格を低して「馮(墨開陰刻)」(宮音 始平)等と姓氏及び声類、貫籍を標し、同行下に附注

(小字、双行)、次行低五格に「能斷」等と章目を標し、次行より「馮簡子」以下本文、底本に同じ。全編左の如し。

甲集(五〇張) (上平声) 一東・馮 十虞・爻

乙集(四四張) 十二齊・齊 二十七刪・環

丙集(三八張) (下平声) 一先・田 九麻・余

丁集(四八張) 十陽・陽 羌

戊集(四五張) 十二庚・程 二十七咸・凡

己集(三八張) (上声) 一董・孔 九麌・鄒

庚集(三五張) 十二齊・禰 五十三謙・湛

辛集(五〇張) (去声) 一送・貢 五十四闕・念

壬集(三五張) (入声) 一屋・陸 三十二洽・郊

癸集(二四張) (覆姓) 上平・公孫 入声・夾谷

四周双辺(一八・二×二・八) 有界、每半張十七行、行二十八字。小黒口、双黒魚(不對)、上尾下「氏族甲」等、下尾下張数。卷尾題「甲集終」等、大尾題「新編排韻増廣事類氏族大全終(隔三格) 癸集(墨開陰刻)」(行)。

本版本文の文字について一言すると、底本の「元」刊十六行本を受け、字画の節略をさらに進め、巻首より簡体を頻用している。また「元」刊以来の墨釘について、そのほとんどを補う

ことなく保存し、底本の丙集第十一張後半第十五行に「姚鏞宋南渡後人号雪坡以功除贛守」の「贛」字の旁が版面の故障で不明瞭であったのを、本版では既に墨釘に作る等、新たに増加したのも散見される。但し綱目の款式を独自に変更した上、姓氏の前後に声類、貫籍を注する十行本の様式を取入れており、その声類注が十行本のままで、十六行本より引継いだ卷内の声類注と食い違っていることは、本版が両者の折衷により成ったことを証している。

〈天理図書館 二八二・二一・イ一七〉

五冊

狩谷椽齋 小津桂窓旧蔵

後補洪引表紙(二三・〇×一五・五糎) 左肩題簽剥落痕、右肩より打付に室町期の筆にて集韻目、左下方「声目 幾」、右下方「全五策」と書す。また上小口より表紙大の剪紙を貼附、室町末の筆にて「排 声目」「全五策」と書し、右肩より又別筆の朱墨にて姓氏を列記す。裏打改装。首冊前見返しに小簽を貼布し「月四(全五)」墨書、直下に双辺方形陽刻「西莊」「文庫」(楷)朱印影(小津桂窓所用)を存す。綱目の後、本文に入る。丙至戊集、辛集を各一冊とする他は毎冊二集(每声一冊)。

室町期の朱筆にて標圈、合豎批句点、稀に欄上朱墨補注、又別手朱墨補注を存す。毎冊首に双辺亀甲形陽刻「椽齋」朱印影、大尾に双辺楕円形陽刻「桂窓」朱印影を存す。

〈静嘉堂文库 陸氏館宋楼旧蔵書 四・七二〉

十冊

甲至乙集配同版本

後補香色表紙(二四・五×一五・五糎) 右下方綫外打付に冊序数を書す。襖紙改装。虫損修補。前副葉、白宣紙。綱目は配本のうちであるが、これには永楽の牌記を欠く。毎冊一集。

間々清人と思われる朱筆を以て豎批点、批句圈、欄上同朱墨補注を加え、別朱句点、又別墨欄上行間補注、鈔補、藍筆欄上標圈を施す。首に単辺方形陽刻「歸安陸／樹聲臧／書之記」、方形陰刻「歸安陸／樹聲叔／桐父印」朱印影を存す(二顆清陸心源所用)。

『儀顧堂統跋』卷十二に「元藪」として著録、以来元版として扱われてきた版本であるが、実は明永楽十七年刊本の、牌記のみを去ったものである¹³。また装訂の異なる首二冊は補配に係るため、左に別掲した。

〈静嘉堂文庫 陸氏・田宋楼旧蔵書 四・七二のうち〉

丙至癸集配同版本

存甲至乙集（十冊のうち二冊）。金鑲玉裝（但し下辺は補わず、原紙高二二・九糎）。首に綱目を存す。但し末葉の後半を刪去し永楽の牌記を存しない。

首に単辺方形陽刻「金陵／放客」朱印影を存す。その他、全般に渉る事項は前記した。

〈台北・故宮博物院 昭仁殿旧蔵書〉

六冊

清揆敍旧蔵

新補藍色絹表紙（二三・〇×一六・八糎）左肩黄櫨染絹題簽を貼布し双辺中「元板新編排韻増廣氏族大全」の題目を書す。同絹包角、破損修補、襖紙改装。每冊前後宣紙副葉。首に綱目を存す、但し牌記刪去。甲、辛集を各一冊とする他、每冊二集。

丙集第二、二十五張、丁集第二十四張、己集第十四張、辛集第九、二十八張鈔補。

間々朱堅句点書入、稀に欄上校注を存し、全編に別手朱筆にて標批圈、批句点、校改、同墨欄上校注を施す。首及び戊集首に方形陰刻「束軒」「翰林／故家」朱印影、每冊首（修補紙上）

に同「謙牧／堂藏／書記」、每冊尾に単辺方形陽刻「謙牧／堂書／書記」朱印影（以上二顆清揆敍所用）、每冊首に方形陰刻「天祿／繼鑑」、每冊尾に単辺方形陽刻「天祿／琳琅」、每冊首尾に単辺紡錘形陽刻「乾隆／御覽／之寶」朱印影、每冊前後副葉に単辺方形陽刻「五福／五代／堂寶」「八徵／耄念／之寶」「太上／皇帝／之寶」朱印影を存す。

『天祿琳琅書目後編』卷十、また阿部志、二六七頁に「〔元末明初間・建〕刊」本として著録¹⁴。

右の他、『嘉業堂善本書影』巻四に収録の存己至癸集葉昌熾附跋本はこれに同版¹⁵、上海図書館協力・カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館編集（陳先行氏主編）『柏克萊加州大学東亜図書館中文古籍善本書志』（二〇〇五年、上海古籍出版社）子部類書類に著録の一本（四五〇番）は、巻首に凶版も存し同版と確認され（日本伝来本）、さらに著録の又一本（四五一番）は、存己至癸集、葉昌熾附跋の劉承幹旧蔵書、即ち前記「嘉業堂善本書影」収録本そのものの由である。また『中国古籍善本書目』子部類書類に録する本書「元刻本」の一（九六三三）は、同書稿本に拠れば十七行二十八字上下細黒口左右双辺及魚尾の

版式であり、完本の上海図書館蔵本、蘇州市図書館蔵本、残本の北京大学図書館蔵本、鎮江市博物館蔵本の四部は本版もしくは同系の版本に当たる可能性がある¹⁶⁾。

同

〔南北朝〕刊 覆〔元〕刊十六行本

右の永楽刊十七行本に先立つ版刻に、「元」刊十六行本を覆した本邦南北朝期刊行の版本があり、世上五山版として流布している。該版の款式字様は、細かな点に至るまで底本のそれを映している。この版については早く川瀬一馬氏『五山版の研究』（昭和四十五年、日本古書籍商協会）に整理著録され、初印本、明徳四年印本、後印本の三種が知られている。本稿では次に解題の上、標記の「元」刊本が底本に当たること、三度目の印本は後修に係ることを指摘し補いたい。なお解題については、底本に異なる点のみを記す（図版九至十一参照）。

先ず綱目、首第二行の魚尾、第三行の韻目黒牌墨囲せず。巻首題下集目墨囲せず、姓氏陰刻（間々陽刻）。巻立張数も底本に同じ。

左右双辺（一八・六×一二・〇糎）。小黒口、上魚尾下題「氏甲」等、大尾題下未刻墨釘。その他、瑣事に渉るが、甲集第二十一張前半第七行（以下「甲21前7」等と略記）より三条ほど未刻の行を遺し、集目張数並に木目状の同心円陰刻、乙2後末尾未刻部に顔相戲刻、丙1至8大黒口、己22前10より未刻部、鏡映しに「月雨」と陰刻、同42後未刻部同「大」と陰刻、庚40前6至9並に14至15未刻等の特徴を挙げることができる。

この版本でも「元」刊十六行本以来改修されない墨釘を、そのままに存するか、或いは空格として処理する上、新たに相当数の墨釘を増している。底本の甲25後16「危禎字逢吉號驪塘宋嘉定中柴興之得謫」の「謫」字が、底本の版面不良のため判読の難しい所、この本では「得■」と墨釘に作り、同様に丙11後15「姚鋪宋南渡後人号雪坡以功除韜守」の「韜」字の旁を墨釘に作り、戊48前3「閻温」条の引書目「魏志」を「魏■」に作り、己17後10「我女縱薄命何能嫁」の「薄命」を、挖改して「婆命」と誤刻し、庚26後13「幸灵建昌人」を「幸■」に作る等、底本不良部分の放置または妄改が目立ち、本版本文の性格を露呈している。ただこれらの現象は、款式字体や字様の相似に止まらず、こうした本文の劣化には、「元」刊本の版面の故

障が直接の原因を成していることから、両者の覆刻の関係が明らかである。

さらに指摘しなければならないことは、本版では字形の相似に由来する初歩的な誤刻を数多く生じている点である。枚挙に暇を得ないが、甲5後13「熊皎號九華山人工詩早行詩云山前猶見月百上來逢人」の末句は「陌上未逢人」の誤りであり、甲7後4「洪興祖（中略）張周与諸州学官」は「学官」、甲38前1「虞（角音 陳留 舜有天下曰（下略）」は「舜」、甲47前10「朱仁軌（中略）終身讓畔不朱一段」は「不失一段」、乙29前2「孫贖與龐涓同學（中略）後涓爲魏將我韓齊」は「伐韓齊」、丁10前4「王恂字少林嘗諸京師」は「詣京師」、丁14後11「王播字明■徵時客揚州木蘭寺」は「徵時客揚州木蘭寺」、己38後1「庾易（中略 長史袁象欽其風贈以鹿角書格蚌盤蚌研无筆」は「牙筆」、庚1後7「米芾（中略）天留米者庵」は「米老庵」、庚36前3「范武字巨卿」は「范式」が正文であつて、これらを単純な誤刻と見るのに、さらなる例証は要しないであらう。右の挙例も一斑を示したのみであるが、本文の未校であることを知るには十分と考える。総じて本文の整わない未熟の版本とする批判を免れない。

〈国立公文書館旧内閣文庫・林家旧藏書 別五〇・三〉 九冊

林述齋手沢

後補香色表紙（二六・一×一五・二糶）左肩打付に「排韻氏族大全 幾」と、右肩より韻目を書す。右肩に单边方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印影を存す。首冊のみ右下方に小簽を貼布し「第一八五号／類書 十二号」と朱書す。第二冊尾に丹表紙剥離痕。改系、虫損修補。綱目を存し本文に入る。壬至癸集を一冊とする他、毎冊一集。

室町期朱筆にて豎批句点、批圈、欄上校改を施し、やや後の朱墨にて欄上校補注、近世の朱筆にて欄上補注を加う。毎巻首に方牌中凹形陽刻「學林」朱印影、单边方形陽刻「述齋衡／新收記」「林氏／藏書」朱印影（以上二顆林述齋所用）、序尾及び每冊尾に表紙同印影、毎冊首に双边方形陽刻「淺草文庫（楷書）」朱印影を存す。

〈国会図書館 WA六・六六〉

六冊

甲集配同版本 天龍寺旧藏

後補丹表紙（二六・二×一六・三糶）洪紙に打付に室町期の筆にて「排韻（甲（乙丙三至九十）」と記した旧表紙の題目を刪

去し、左肩に貼附す。右肩打付に後筆にて韻（或は声）目を書す。左下方打付に又別筆にて「辰」と書す。五針眼、改糸、裏打改装。見返し後補。甲、辛集を各一冊とする他、每冊二集。

識語同筆の室町期の朱にて豎句点、同朱墨欄上校注を施す。大尾題後に「庚寅夏林鐘初八日於龜山春雨軒下／滴露研朱點之畢焉點者曰管窺蠡測／恐有片寫之誤乞博達為之改惡取善矣」朱識、末字上に鼎形模糊朱印影を存す。第一冊後見返しに「敬直」、

第二至五冊後見返しに「稽古堂」、第六冊朱識後に「義直」墨識を存す。第二至五冊首に双辺方形陽刻「心／關」朱印影、每冊首に単辺方形陽刻「山田／學校」朱印影、同「讀杜／艸堂」朱印影（寺田望南所用）、同「東京／圖書／館藏」及び明治二十九年購求印影を存す。

右の朱識について、室町期の庚寅は応永十七年（一四一〇）、文明二年、享祿三年の三度、「龜山春雨軒」とは、靈龜山天龍寺のいずれかの庵中であろうと思われる。また鈴印のうち「心／關」とは、或いは臨濟宗古林派で月林道皎門下の心閑清通か。心閑は応安八年（一三七五）生、はじめ天龍寺に掛籍、心伝の道号を用い、応永十七年三月から天龍寺に住した大岳周崇の下で焼香侍者を務め、同二十六年備後康徳寺に出世して法を古雲

清遇に嗣ぎ、大岳に依って道号を心閑に改め、永享十二年（一四四〇）天龍寺に住し（九十九世）、文安六年（一四四九）に示寂した。仮に朱識の点者をこの心閑清通とすれば、応永十七年庚寅の夏に天龍寺に在ったことは符を合するが、当時は未だ心閑と名乗らない。後年の鈴印であろうか、記して後考に俟ちたい。

〈国会図書館 WA六・六六のうち〉

乙至癸集配同版本

存甲集（六冊のうち一冊）。原料紙匡郭外を刪去し（櫛齒状に書入部分のみ存す）旧表紙上に貼附し、さらに裏打修補を施す。網目を欠き本文に入る。

室町末近世初の筆にて朱豎批句点、傍線、行間校注校改、欄外墨校補注を加う。後見返しに「敬直」墨識。配本前掲。

〈天理図書館 二八二・二一・イ二一〉

合四冊

後補香色表紙（二五・八×一五・八糎）左肩双辺摺枠題簽を貼布し「氏族排韻〈声目〉幾」と書す。小口書、もと九冊。書背「氏族／合巻／共、二」、即ち正確には九冊より二冊に合し四冊に

分かつ。綱目を存し本文に入る。もと壬至癸集を一冊とする他、毎集一冊。一時甲至丁集、戊至癸集と二冊に合し、現在は丙至戊集、辛至癸集を各一冊とする他は毎冊二集（上平、下平、上声、去入覆姓）。

室町期の墨筆にて欄上行間校改、補注（仄声には稀）、室町末の朱筆にて堅批句点、近世期の朱墨にて欄外行間標補注書入。

首、戊集首（旧二冊時毎冊首）に单边凹形陰刻「乗／付」、单边方形陽刻小「乗附文庫（楷）」、毎冊首に单边方形陽刻大同文朱印影、单边方形陽刻「脩道館（隸）」朱印影、同「寶玲文庫（行）」朱印影（フランク・ホーレー所用）を存す。

この本『五山版の研究』未収。

〈大東急記念文庫 一三・三〇・三三〉

己至癸集配同版明德四年印本

五冊

後補草色漉目艶出表紙（二三・六×一四・七糎）左肩題簽を貼布し「新編排韻増廣事類氏族大全（甲乙）一」等と書す（集目冊序数朱書）。草色包角。綱目鈔補。戊集、辛至癸集を各一冊とする他は毎冊二集。

室町期末批点、別朱標圈、堅句点、同墨欄外校改、室町末近世

初朱欄上行間校改、鈔補、首冊のみ行間補注を施す。毎冊首に单边方形陽刻「菩提樹菴／圖書印」朱印影、同「爲可堂／藏書記」朱印影を存す。配本後掲。

『五山版の研究』では、配本の刊記に従い明德の後印本と録するが、前半は別の伝本で、後出した無刊記墨釘の故宮博物院藏本に比して早印と認められる。

〈台北・故宮博物院 楊氏觀海堂旧藏書〉

四冊

正長元年（二四二八）加點識語 東福寺南昌院旧藏

後補淡洪引表紙（二三・八×一四・六糎）左肩淡茶色題簽を貼布し「氏族排韻 声目」と書す。下辺に单边凹形陽刻不明朱印影を割り掛けに存す。天地截断、虫損修補。首に楊氏影像、毎冊前副葉。綱目を欠き、本文に入る。丙至戊集、辛至癸集を各一冊とする他は毎冊二集（上平、下平、上声、去入覆姓）。

大尾題下に「正長元年十月二日／塗朱了也／是年應永三十五改元」朱識。室町期以下数手の朱筆にて合堅句点、批圈、傍線、行間校注校改を加え、室町末近世初の朱墨を以て欄外及び夾紙上に補注を施すことが夥しい。縹色不審紙を貼附。毎集首に方形陰刻力不明朱印影、双边方形陰刻「中／膽」朱印影、单边方

形陽刻「南昌院」^(書)朱印影(以上三顆捺滅)、每冊首に方形陰刻「巢／柰」朱印影、同「飛青／閣滅／書印」、首に同「宜都／楊氏滅／書記」、「楊印／守敬」、単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」朱印影(以上四顆清楊守敬所用)を存す。

『日本訪書志』卷十一、阿部志一一七頁著録。『五山版の研究』未収、但し書帙には川瀬氏審定の識語を附す。

又 明徳四年(一一三三)印

前記無刊記本に対し、大尾題下の墨釘に刀を入れ「明徳へ癸／酉」八月開板「圓／成」^(行)と刻する後印本がある。記文は明徳四年刊刻完成の意に解されるが、これより早印にして無刊記の伝本を少なくとも六点存する上、前本に比して補刻の張子も認められず、刊記の他に挖改の箇所は見出されないため、明徳四年の後印本として標示した。なお匡郭の収縮等は特に認められない。

〈東洋文庫 一B・e・l〉

妙心寺退蔵院旧蔵

九冊

新補淡茶色表紙(二四・四×一五・八糎)左肩題簽を貼布し「排韻氏族大全(五山版)箋」と書す。襖紙改装、天地截断。綱目を存し本文に入る。壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。室町期末朱豎句点、行間校改を加え、別朱にて批点、批圈、傍線、欄上標注を施し、室町末別朱墨にて欄上補注書入。首に単辺方形陽刻「法山」退蔵院^(書)朱印影(正法山妙心寺退蔵院所用)、第三冊首に同「唐氏／原泉」朱印影、每冊尾に単辺方形陽刻「雲邨文庫」朱印影(和田維四郎所用)、每冊首に同「江山／月莊」朱印影(稲田福堂所用)を存す。

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

四冊

後補香色菱繫胡蝶文空押艶出表紙(二四・二×一六・八糎)左肩打付に「へ氏族／排韻(声目)共四」と書す。右肩方簽を貼布し朱圈中に「收」と墨書、その上に重ねて方簽貼布、朱圈二顆、上圈中に「呂」と墨書す。首冊後補前見返し下に附箋、「二〇八」墨書並に単辺方形陽刻縦横有界「徳富氏／圖書記」^(書)朱印影等を存す。旧補前副葉に室町期の筆にて字目標注。綱目を存し本文に入る。丙至戊集、辛至癸集を各一冊とする他は每冊二集(上平、下平、上声、去入覆姓)。

室町朱豎批句点、校改、鈔補、欄上声目標注、稀に補注を施し、稀に室町末の墨筆を以て欄外に補注を加う。毎冊首欄上に

〔毎字改行 清寥菴公用〕墨識、大尾後補見返しに「本智勝所藏之

書也／以貨購得之」墨識を存す。毎冊首に単辺小判形陽刻「智

勝／書藏」朱印影（墨滅）、単辺方形陽刻不明朱印影（朱滅）、

毎冊尾に単辺小判形陽刻「瑞堂新□」朱印影（墨滅）、毎冊首

尾に双辺方形陽刻「蘇峰／清賞（楷）」、毎冊首に単辺円形陽刻

「Tokunomi／（陰）刻」一、同方形「天下之公／寶須愛護（楷）」、同

石形「成／簀堂／主」、双辺方形陽刻「徳富／所有（楷）」、同

「成簀堂」、単辺同「經國之大業／不朽之盛事」、毎冊首尾に聯

珠方形陰刻「徳富／猪印」単辺方形陽刻「蘇／峯」、第二、三

冊尾に双辺方形陽刻「蘇峰學人／徳富氏愛／藏圖書記」、第三

冊首に単辺方形陽刻「蘇峰／清賞」、同「青山／艸堂」朱印影（以上十四

方形陰刻「蘇峰／清賞」、同「青山／艸堂」朱印影（以上十四

類徳富蘇峰所用）を存す。

この本の巻首及び大尾の書影を『善本影譜』第一期第十輯（昭和七年）に収録する。

〈天理図書館古義堂文庫 古一六六・一〇〉

八冊

後補古丹表紙（二五・〇×一五・三種）左肩打付に「氏族排韻
〈集目声目〉」と書す。改糸。網目を存し本文に入る。己至庚集、
壬至癸集を各一冊とする他は毎集一冊。

室町期朱豎批句点、校改、同墨欄上校注、稀に同朱墨欄上補注
書入。縹色不審紙。癸集第二、三張間に剪紙を夾み「明德四癸
西与南朝和之翌年也／後円融帝崩御之歳 明大祖／洪武二十六
年該当 自大正七年／五百二十七年」墨識。毎冊首に単辺鼎形
陽刻「春／外」、同方形「東／榮」朱印影を存す。

この本『五山版の研究』未収。

〈東京大学総合図書館青洲文庫 A〇〇・五八一八〉 一冊

存乙集

〈陽明文庫 三七七・一一〉 一冊

存壬至癸集

表紙欠（二六・七×一七・〇種）。前冊前見返し（剥離）前半
の右肩に「五山版」と墨書す。

室町期朱豎批句点、引書目合点、韻字標圈、行間校改、稀に返点、
連符、批圈を加え、同墨欄外校改を施す。毎冊首に単辺方形陽
刻「近衛藏」朱印影、前冊首に双辺方形陽刻「青洲文庫」朱印

影（顛倒、渡辺青洲所用）を存す。

この本『五山版の研究』未収。

〈書肆某〉

小津桂窓旧蔵

五冊

後補古丹表紙（二五・五×一五・八糎）左肩題簽を貼布し「氏族排韻〈韻目／韻目〉」と書す。左下方付後に後筆にて「共五冊」と書す。首のみ題簽上に又別筆にて集目を書し、右肩小簽を貼布し「月四〈全五〉」墨書、双辺方形陽刻「西莊文庫（書楷）」朱印影（小津桂窓所用）を存す。第三冊前方には書肆新補江戸初丹表紙。尾冊前表紙下小口に旧安田文庫所用の附箋。一部虫損修補、一部裏打修補。綱目を存し本文に入る。毎冊二集、庚集第一張欠。

室町期朱豎批句点、批圈、稀に返点、每集首張版心上に標柱、欄外朱墨校補注を加う。縹色不審紙。毎冊首に双辺方形陽刻不明朱印影、同単辺「雲／泉」墨印影、重鈐して双辺楕円形陽刻「桂窓」朱印影を存す。

〈大東急記念文庫 一三二・三〇・三二一のうち〉

甲至戊集配同版無刊記早印本

存已至癸集（五冊のうち二冊）。天地截断。大尾に明徳四年の記を有する。

室町期の朱豎批句点、欄外行間校改、稀に別手室町期朱墨欄上補注を加う。末冊首に不明朱印影を存す。配本前掲。

〈天理図書館 二八二・二一・イ一九〉

分二冊

存丙至丁集 美濃南泉寺旧蔵

後補黄檗染（縹色）表紙（二二・五×一五・一糎）首冊左肩題簽剥落痕。天地截断、虫損修補、改系。小口書、もと「排／勺」、現在は上下半に分かつ。毎冊一集。

室町末朱豎批句点、欄上行間校注校改、同別墨欄上標注、又別墨校改を施す。尾に双辺鼎形陽刻「則／堂」墨印影、前冊前副葉及び後冊後見返しに単辺方形陽刻「濃州南泉／藏書之記（書楷）」墨印影、毎冊首に「寶玲文庫（書行）」朱印影（フランク・ホーレー所用）を存す。

南泉寺は岐阜県山県市高富町に在る臨濟宗妙心寺派の瑞応山南泉寺と思われる。開山仁岫宗寿、開基土岐頼純と伝える。この伝本は残存二集であるために、明徳の刊記の有無、補刻の様

子等、十分に判ずることが出来なかつた。やむなくこの位置に掲出したが、さらに後印の次掲後修本に並ぶ可能性がある。

この本『五山版の研究』未収。

右の他『天津図書館蔵日本刻漢籍書目』子部に「新編排韻増廣事類氏族大全十卷〈不著撰人〉／日本明徳四年（洪武二十六年）刻本 半葉十六行 行二十八字 黒口 四週單邊 S 八三・五三／（中略）是書卷一爲抄配」と著録の一本は、巻首の写真に拠つて本版明徳四年印本と確認され、印影により備前岡山城清泰院旧蔵と知られる。清泰院は岡山市に在り、藩主池田家菩提所である万才山国清寺（臨濟宗妙心寺派）の塔頭である。

又 後修

右の明徳四年印本に対し、大尾下に刻した刊記を削り、無文とした後印本がある。早印本も無刊記であつたが、彼に存する墨釘を、此には欠いている。またこれに際し、新たに甲集第十張の板木を改刻した。よつて本稿ではこれを後修と標記する。なお件の改刻につき、原板に不鮮明であつた第十張首「蒙驚」

の「驚」字を、新版では墨釘に作り劣化の度を進めた。

〈お茶の水図書館成篋堂文庫〉

円覚寺黄梅院旧蔵

九冊

後補縹色艶出表紙（二一・八×一五・一糎）、第二冊後方栗皮表紙。「排韻事類氏族大全〈集目〉」と墨書の題簽剥離、本文に差夾む。首冊のみ蘇峰筆にて左肩打付に「五山版／排韻氏族大全」、右肩「中梧和尚遺愛〈共九／全〉」と書す。改糸、襷紙改装、天地截断。扉、左肩に「排韻事類 甲」等と書す。綱目を存し本文。壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。

室町期朱標圈、豎句点、傍線、校注校改、鈔補、稀に欄上補注を加え、稀に同別墨行間欄上補注書入。每冊尾に「中梧」墨識並に单边鼎形陽刻不明朱印影を存す。每冊首に及辺亜形陽刻「黄梅」墨印影、单边方形陽刻「黄梅院藏書」朱印影、同「成篋堂／圖書記」、方形陰刻「蘇峯學人／曾經一讀」、双辺円形陽刻「徳富（楷書）」、首に同方形「貴重品（楷書）」、方形陰刻「讀書／懐古」朱印影（以上五顆徳富蘇峰所用）を存す。

この本の太尾の書影を『善本影譜』第一期第十輯に収録する。

後補洪引表紙(二五・六×一六・五糎) 左肩打付に隨風筆にて「氏族排韵(甲乙)」等と書し、右下方に同筆にて「隨風」と自署す。首冊のみ題下に双辺方形陽刻不明墨印影を存し、中央下方打付に別筆にて「八十三」と書す。第二冊表紙前後錯。五針眼。第四冊後副六葉。綱目を存し本文に入る。毎冊一集、己集第三十三、三十二張錯綴。辛集第四、五、八至十二張大破、補紙。

室町期朱豎句点、校改、稀に同朱墨補注、室町末墨欄上標注、稀に補注(第六冊後副葉にも) 書入。毎冊首に首冊前表紙同墨印影を存す。

隨風とは天海の初名に当たる。この本『五山版の研究』未収。

右の他『五山版の研究』に、川瀬氏の称する後印本として三井文庫旧蔵九冊、穂久邇文庫蔵(合) 四冊(市野迷庵旧蔵)と録し、又川瀬氏が『大英図書館所蔵和漢書総目録』漢籍編子部類書類に著録する本書「南北朝刊 五山版 後印」本(合) 一冊(アーネスト・サトウ旧蔵)は、いずれも本稿に称する後修本と思われるが未見、サトウ旧蔵本のみは『総目録』に該本巻首

の書影を掲載しており、最末に記した天海藏本と同版で、同程度の後印本と確認される。

以上、伝本の調査を尽くしていないが、現時点で仮に本版諸伝本の様相を判ずると、南北朝に将来された粗雑な「元」刊十六行本を底本とし、本文の改修に及ばず安易に覆刻された本書の「南北朝」刊本は、室町の初には、京師五山周辺の禅僧に受容されていた。以下、補刻を含んで数次に及ぶ印行と、いわゆる五山版にして十指に餘る伝存数が示すように、本版は長きに渉り弘通したものと考えられる。該本の受容には先ず、手校による改正に相当の労力を費やさなければならなかったにも関わらず、さらに進んで、室町の朱点朱引を伴わない本は皆無と言つてよく、書人の様子もまた版本の消長と揆を一にする。本書の内容は連綿する著述ではなく、氏名に寄せて章節を分断した編著であるのに、本版への書人が屢々全編を尽しているのは、禅林に於いて本書の常用されたことを強く示唆し、時ならぬ参照の準備として、句読を切り校改を施して、怠りなく名辞や故事を標出していく手順は、韻書に於ける書人と同様の方法であり、読書の対象と言うより、表現を産み出す循環の一部と見るべきである。その意味で、夾紙を加え紙面を拡張し、書人によって

機能を強化した故宮博物院蔵本の如きは、伝本自体が本書受容の姿をよく体现している。本版諸伝本の旧蔵者を見ると、そうした受容は当初五山の核心に発していたものが、東国や地方の禅院、林下へと広がり、室町の後葉に向けて、緇素一般の知識人にも広がり、近世に至ったものと見られる。^[17]このようにして古活字本の印行が次第に準備された。

同

元和五年（一六一九）刊（木活字）翻「南北朝」刊本

該本は前掲した本邦「南北朝」刊本に基づきつつ、木活字を用いた款式を改めた翻印本で、世上にいわゆる古活字本に当たる。古活字本の常例として、元版以来首に附されてきた綱目が失われ、打付に本文を存する形が取られているけれども、本文の組織自体に変更はない。次に解題を加えて伝本の詳細に及ぶ。

（図版十二、十三参照）

巻首題「新編排韻増廣事類氏族大全（隔七） 甲（至癸） 集（墨閉）、次行「一東」等韻目（墨閉陰刻）、次行一格を低して「馮（墨閉陰刻）」（或陽刻）、同行下に附注「宮音 始平」等と姓氏及び声類、貫籍を標し、同行下に附注

（小字）、次行低四格に「能斷」等と章目を標し、次行より「馮（双行）」以下本文。記事の末に「左襄三十一年（小字）」等と引書目を附す（間々欠く）。また行を接し、低三格「女德婚姻（墨閉陰刻）」と標して、さらに章目本文を附す。また同姓の末尾には章目を置かず、圈発下に簡略の伝を列す。末行下さらに圈発を打って韻藻を列す。屢々毎姓改張。全編左の如し。

甲集（七三張）（上平声）

一東・馮― 十虞・爰

乙集（六七張）

十二齊・齊―二十七刪・環

丙集（五七張）（下平声）

一先・田― 九麻・侖

丁集（七〇張）

十陽・陽― 羌

戊集（六九張）

十二庚・程―二十七咸・凡

己集（五六張）（上声）

一董・孔― 九麌・鄔

庚集（五二張）

十二齊・禰―五十三謙・湛

辛集（七四張）（去声）

一送・貢―五十四闕・念

壬集（五二張）（入声）

一屋・陸―三十二洽・郊

癸集（二二張）（覆姓）

上平・公孫― 入声・夾谷

四周双辺（二一・七×一六・〇糧）有界、每半張十三行、行二十四字。中黒口、双花口魚尾（対向）間、題「排韻卷幾」、張数。魚尾の花弁に六枚と四枚とがあり、甲集巻首では前者が第

三、六、九張等と循環する。巻尾題「甲集終」等、大尾題「新編排韻增廣事類族大全終」。

大尾題後二行を隔し二格を低して「元和五(己)未年九月日」の記あり、本文とは別種の大字。

該本の本文はやや複雑な性格を有する。便宜五段に分けて説明したい。一、該本は「元」刊十六行本以来の墨釘の箇所を、やはり正文に改め得ず、空格に変じて継承する。二、該本は十三行二十四字の款式であるが、その排字は前出十六行二十八字本の款式を前提とする。例えば甲集第十三張前半第六行(以下「甲13前6」等)「豊稷宋哲宗朝為殿中侍御大夫司諫首論蔡京之罪罪数上疏言／近習へ之／非」と末尾を小字双行としているが、これは二十行本に見られる通り元来「近習非之」の本文であったのを、毎行二十八字の十六行本が次行に及ぶことを避け、第二十七、八字を双行に作ったまでであつて、該本では既に改行の後であるから同じ処理を要しないのであるが、期せずして元の款式を保存したものである、など。三、本邦刊刻の先行「南北朝」刊本に墨釘を増した箇所について該本を検すると、前者甲25後16「危嶺字逢吉號驪塘宋嘉定中柴與之得■」を、後者は甲36後1に「得謫」に作り、同様に丙11後15「姚鋪宋南渡

後人号雪坡以功除■守」を、丙16後2「贛守」に、戊48前3「閩温」条の引書目「魏■」を、戊65後1「魏志」に、己17後10「我女縱「婆命」何能嫁」を、己24前13「薄命」に、庚26後13「幸■建昌人」を、庚35前7「幸灵」に作っているのは、みな元来の正文に拠っており、「南北朝」刊本以前の本文を用いたかに見える。四、しかし翻つて「南北朝」刊本が誤刻を犯した箇所につき該本を検すると、前者の甲7後4「洪興祖(中略)張周与諸州学宮」を、後者の甲9後11にやはり「学宮」に、甲38前1「虞へ角音 陳留 舜有天下曰(下略)」を、甲47前8「舜」に、甲47前10「朱仁軌(中略)終身讓畔不朱一段」を、甲59前7「不朱一段」に、丁10前4「王饨字少林嘗諸京師」を、丁13前6「諸京師」に、丁14後11「王播字明■徵時客楊州木蘭守」を、丁19後3「徵時客楊州木蘭守」に、己38後1「庾易(中略)長史袁象欽其風贈以鹿角書格蚌盤蚌研无筆」を、己51後11「无筆」に、庚36前3「范武字巨卿」を、庚47後2「范武」に作っており、いずれも「南北朝」刊本に特有の誤文を継承している。これを前段の墨釘の処遇と併せ考えると、該本では基本的に「南北朝」刊本に拠りつつ、他本によって校改できる墨釘を除くことは怠らなかつたのであり、誤文のうちでも、「南

北朝」刊本の甲5後13「熊皎號九華山人工詩早行詩云山前猶見月百上來逢人」を、該本甲7後5「陌上未逢人」と、乙29前2「孫贖與龐涓同學（中略）後涓爲魏將我韓齊」を、乙40後10「伐韓齊」と、庚1後7「米芾（中略）天留米者庵」を、庚1後13に「米老庵」と作るののは正文を得ており、一通りの校訂が爲された痕跡を見出すことができる。五、ただこれに加え、該本に独自の異同もまた散見され、丁51後7「姜詩（中略）一日舍側忽有湧泉味於江水」は、諸本「味如江水」に作り、同12「姜維（中略）魏破蜀維囚」は「維囚」に、己44前2「杜預字元凱」は「字元凱」に作る所であつて、やはり翻印に伴う劣化を防ぐことができなかつた。以上の行説をまとめると、元和五年刊行の古活字本は、十六行本系統の本邦「南北朝」刊本を翻印し、墨釘や幾つかの誤文等、底本の不備を一部校改して整えたが、完全には回復せず、一方誤植によつて新たな不備も加えた形の本文を有している。

さらに該本採用の字体を見ると、これまでに掲げた版本に同じく、繁簡取混ぜながら多くは簡略に就く様相を示しているのであるが、本来活字本は底本の字体に規制されず、諸書に共通の字体を用いるが故に、一度の刮板で種々の本文を表現できる

道理であるから、翻印と言つても字体のレベルでは必ずしも底本に従わない性質のはずであるが、本書古活字本の場合、簡略に渉る旧版の字体が、屢々そのままに再現されている。これは偶然の合致ではなく、該本所用活字の製作が、当該の翻印を契機として成されているからであらうと判断される。他書刊行時の同種活字使用について知見を得ないが、当面そのように理解しておくこととしたい。なお字体に於いて一致すると言つても、底本の中でも字体の不定が認められるから、特定の排字に於いて常に底本の字体に等しいわけではなく、例えば該本では「爲」字について略体の「爲」を規範としたが、底本の巻首に於いては特に「爲」を用いるので、その箇所では、彼此の字体は一致していない。ともあれ、元和五年の刊行に木活字を用いたことは、曖昧なまま放置されていた底本の字体を一定の規範に添わせる効果を上げ、意改の危険を冒しつつ、ある程度本来の面目を回復していることは、指摘してよい事柄であろう。

以下個々の伝本について記すが、活字本の常例として、諸本印行の先後関係は明らかではない。以下の配列は恣意に係ることを予め諒とされたい。

〈陽明文庫 八一〉

十冊

丹正繁唐草文空押艶出表紙(二八・九×二〇・三糎) 左肩打付に「排韻(甲)」等と書し、右肩より同筆にて韻目を列記す。

押し八双。改糸。本文楮打紙(諸本同様、以下注記を略す)。

每冊一集。丁集第二十五張に整版本を配す。

朱豎批句点、批圈、稀に校注校改、ごく稀に墨校改書入。縹色不審紙を貼附。

〈大阪府立中之島図書館 甲和・一一〉

九冊

寛永間識語 恵林寺旧蔵

栗皮表紙(二八・六×二〇・四糎) 中央下方「調」白書。改糸。前見返しに集韻目並に張数を列記す。壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。

朱豎句点、校改、行間校注を加え、稀に江戸初の墨筆にて返点、連符、音訓送仮名書入。大尾に「寛永■■■■八月晦日求之

「」(花) 墨識(墨滅)。每冊首に単辺亜形陽刻「恵林什書／

門外不出(書) 朱印影、每冊尾に方形陰刻「麟／猫」朱印影、

第一、六冊首に不明朱印影を存す。

〈国会図書館 WA七・二二二〉

九冊

大徳寺多福庵 円光寺開福庵旧蔵

後補浅葱色艶出表紙(二八・二×一八・九糎) 左肩打付に「排

韵氏族(幾)」と、右肩「騰」と書す。右肩打付に後筆にて声

韻目を書す。虫損修補、五針眼、改糸。見返し並に前副葉前半

新補。前副葉後半(旧前見返し)に「圓光寺／開福庵蔵」墨識。

壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。乙集第六十五張を欠く。

朱豎批句点、批圈、傍線、欄上行間校注校改(以上両筆を交う、

仄声以降は稀)、稀に行間墨補注書入。縹色不審紙。每冊首に

単辺方形陰刻「多福文庫」朱印影(大徳寺多福庵所用)、同陽

刻「瑞巖圓光／禪寺藏書(書)」朱印影(京円光寺所用)を存

す。每冊首に明治三十九年当館購求受入印を認む。

伏見版で著名な瑞巖山円光寺の旧蔵書であるが、伏見版活字

印本とは特に関連が認められない。

〈大東急記念文庫 三五・三三一・五七八〉

合四冊

多湖訥齋 信濃恵光院旧蔵

後補淡茶色表紙(二七・二×一九・五糎) 左肩打付に「氏族排

韵(春(至冬) 上平(至去入)」と書し、直下に同筆にて「巖」

と朱書す。破損修補、天地截断。もと壬至癸集を一冊とする他、每冊一集の九冊、これを合して、甲至丙集、辛至癸集を各一冊とする他は每冊二集の四冊とす。

首のみ江戸初朱標批圈、豎批句点、傍線、行間校注校改、稀に欄上朱墨補注書入。毎旧冊首に単辺香炉形陰刻「□／叔」朱印影、重鈴して単辺方形陰刻「□／和」朱印影、毎冊首に単辺方形陽刻「湖家／藏書」朱印影（多湖訥齋所用）、毎冊尾に同「松本／慧光／什物（書）」藍印影（信濃恵光院所用）を存す。

多湖氏は歴世松本藩崇教館の儒者、円覚山恵光院は信州松本城下、臨濟宗妙心寺派、寛永十五年開創。

〈お茶の水図書館成算堂文庫〉

九冊

丹漉目表紙（二八・一×二〇・〇）糧 右肩打付に「成」と書す。首冊のみ左肩打付に別筆にて「排韻増廣事類」と書し、中央に亀甲形牌中円形陽刻「トク／トミ」朱印影を存す。押し八双。一部改系。見返し並に前後副葉後補、首冊前見返し下小口附箋、又別筆「排韻増廣事類大全（低五）」共九」墨書。首冊前見返し前副葉間に又又別筆「排韻事類大全〈活板〉」墨書剪紙を差夾む。壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。

朱豎批句点、批圈、同朱墨行間校改書入。縹色不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻「東／海」朱印影、第一至九冊首に単辺方形陽刻「天下之公／寶須愛護（書）」同「徳富／文庫」、同「徳／

富（書）」、同「蘇峯／珍藏」、又辺同「蘇峯／清賞（書）」、方形陰刻「蘇峯／清賞」、又辺方形陽刻「成算堂」、單辺右形陽刻「成／算堂／主」、又辺方形陽刻「徳富／護持（書）」、單辺方形陽刻「蘇／峯」、方形陰刻「青山／艸堂」、同「菅印／正敬」、單辺方形陽刻「蘇／峰」朱印影（以上十三顆徳富蘇峯所用）を存す。

〈東洋文庫 三A・h・一五〉

九冊

淡茶色表紙（二八・二×二〇・一）糧 左肩打付に書入と同筆にて「排韻氏族〈甲集／上平一〉」等と、右肩より韻目、右下方「共九」と書す。首冊、第四冊のみ中央に別筆にて「荒」と書す（又別朱「日」に重書）。改系。毎冊前見返しに書入と同筆にて声韻氏目を列記す。壬至癸集を一冊とする他、每冊一集。江戸初の朱筆にて韻序数、豎批句点、欄上行間校注、返点、音訓送仮名、韻首版心標点、同朱墨欄上行間校補注（「勺府」と校すること甚し）書入。上辺附箋。毎冊首に單辺方形陽刻「國

「清寺」墨印影を存す。

〈韓国学中央研究院蔵書閣 丁三・四六八A〉

九冊

李王家旧蔵

〈慶應義塾図書館 二四・七〉

九冊

栗皮表紙（二八・二〇・〇種）首冊のみ左肩打付に「氏族排韻〈甲集〉」と、右肩より韻目を朱書す。押し八双。改糸。壬至癸集を一冊とする他、毎冊一集。

後補香色表紙（二七・〇×一八・六種）左肩双辺摺枠題簽を貼布し「排韻増廣事類氏族大全 幾」と書す。右下方綫外打付に「共九」と書す。虫損修補。壬至癸集を一冊とする他、毎冊一集。

朱合標豎批句点、標批圈、行間校改、欄上標注、欄上墨標注書入（乙集以下は稀）。毎冊首に「佐々木氏／藏書印（書）」朱印影、当館「佐々木哲太郎氏／遺書寄贈之印／慶應義塾圖書館」受人印影を存す。

朱豎批句点、批圈、稀に同墨欄上校注書入。毎冊首に単辺方形陽刻「江風山／月莊」、同「稲田／福堂／圖書」朱印影（二顆稲田福堂所用）、同「李王家／圖書之／章」朱印影を存す。

〈市立米沢図書館 米澤善本二九〉

九冊

後補香色漉目艶出表紙（二七・三×一九・三種）左肩題簽を貼布し「排韻氏族〈幾〉」と書す。首冊のみ右肩より打付に「〈子八十二〉」と朱書す。第三冊前表紙中央に貼紙して「石典籍覧」と書す。改糸。虫損修補。壬至癸集を一冊とする他、毎冊一集。朱豎批句点、批圈、傍線、欄上行間校注校改、稀に墨行間補注書入。丙集後半以降は疎。毎冊首に方形陰刻「忠／辰」朱印影、單辺方形陽刻「興讓館蔵書」朱印影を存す。

右の他、川瀬一馬氏「〈増補〉古活字版の研究」（昭和四十二年）に久原文庫、安田文庫、高木文庫蔵本を録するが、知見を得ない。このうち安田文庫本は同書に大尾図版を掲載し、同種印本と確認される。また『中国科学院図書館蔵中文古籍善本書目』子部類書類に本書「日本活字印本」九冊を録するが、これは北京人文科学研究所以来の襲蔵書と目され、同所蔵書目録にも「日本元和五年活字本」を録するから、同種本の可能性が高い。後の著録を期す。

該本諸伝本の書入や旧蔵者を見ると、室町以来の遺風を伝え、

禪院での使用に特色がある。古活字本の書入も朱点朱引を主として、日用の求めに備える趣である。ただ旧時に比し、その稠密さに於いては後退の傾向も窺われ、仄声以降に疎である場合が目に着き、専ら韻事に限る等の用途の縮小が想定される。また収蔵者の傾向は必ずしも明確ではないけれども、近世の初に興隆した林下や地方禪院への伝播を指摘することができる。

ここで和刻本の解説に向かうべき順序ではあるが、行説の都合上、少しく溯って明版二種の刊刻について述べたい。

新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目十集二十八卷

元闕名編 明周尚文增 傅起巖校

〔明〕刊

本版は明代の後葉に刊行された坊刻本であり、角書を改めたものの、巻首附編の題目をそのまま本文に冠する等、首題からして既にその粗雑を露している。しかし少しく編集を新たにし、記事の増修も認められる。

先ず徐序（三張）、首題「刻氏族大全綱目叙」、次行より一格を低し諱字單擡にて本文「（上略）近因閩省倭寇／為梗坊間舊板

燒毀無存書林陳氏崑泉／子者購求重梓所頼家藏萬卷此帖猶新／不敢自私自售與四方好古者共之（中略）又得後學中洲子者加以（據）皇明人文遂韻增入可請全書矣同志君子／幸留意焉／（低七格）江右德興北山徐湯謹序（書）六行十七字。

序者の徐湯は伝を明らかにしないが、これは、倭寇の災禍により閩省に在った本書の旧版が焼失したのを見て、書舖陳崑泉が重刊を企て、家藏本の提供を求めたというのである。この陳氏は積善堂を称する閩の書舖で、名を孫安と言ひ、概そ万曆の初年に版刻の事蹟がある¹⁸。さらにまた、中洲子なる者の編集を加え、韻ごとに「皇明人文」を増入したという。これは言及に正確さを欠くものの、巻首や本文の状態には対応する点がある。また後に見るように、中洲子とは、江右饒安の周尚文のことと知られる。

右の序について、丁丙の『善本書室藏書志』巻二十に同題の「萬曆刊本」二十八巻を著録し「前有萬曆二年德興北山徐湯序、後有萬曆三十七年癸酉歲秋月陳氏積善堂奇泉梓木記」と称する¹⁹。これに従えば、徐序及び陳崑泉重刊の事蹟は万曆二年に、本版は同三十七年の陳奇泉（同属、名孫賢）積善堂の重刊に係ることになるが、知見の伝本にはこれを証することができない。

次で綱目（一四張）、首題「新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目」、次行黒魚尾下低一格に集目、次行低二格に声目、次行低参格に韻目を標し、次行より声類（開懸）、姓氏、貫籍を列す。毎行五段、癸集、覆姓の夾谷氏に至る。十行二十字。尾題「氏族目錄畢」。

卷首題「新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目卷之一（至二十八）

（隔五格） 甲（至癸集）（低九格） 江右（大字格） 饒安 後學 中洲

周尚文 校閱／旺江 庠生 築野 傅起巖 參閱」、次行三格を低して「〇一東」等と韻目を標し、次行線黒魚尾下低一格に

「馮 宮音 始平」等と姓氏、声類、貫籍を標し、同行下に附

注（小字、双行）、次行低三格に「〇能斷」等と章目を標し、次行より

「馮簡子」以下本文。每章改行、末尾に「左襄三十一年」等と引書目を附す（間々欠く）。さらに行を接し、花口魚尾下に

「女徳婚姻」と標して次行より章目本文を連ね、後に圈発下に簡略の編を列す。末尾にまた行を接し、花口魚尾下に「皇明人文」と標し、次行より章目本文を増入す。全編左の如し。

甲集 第一卷（二張）（上平声） 一東・馮 一 風

第二卷（二張） 二冬・龍 一 四江・雙

第三卷（二〇張） 五支・支 一 九魚・諸

乙集 第四卷（二八張） 十虞・虞 一 爰

第五卷（三八張） 十二齊・齊 一 十七眞・邨

第六卷（一五張） 二十一文・文 一 二十二元・宛

第七卷（九張） 二十五寒・寒 一 二十七刪・環

第八卷（二三張）（下平声） 一先・田 一 五爰・茅

第九卷（一五張） 六豪・陶 一 勞

第十卷（四張） 七歌・羅 一 九麻・余

丁集 第十一卷（二八張） 十陽・陽 一 王

第十二卷（一九至十一、十二、計二張） 黃 一 姜

第十三卷（二七張） 梁 一 羌

戊集 第十四卷（二七張） 十二庚・程 一 十五青・洽

第十五卷（四張）（十六蒸） 滕 一 弘

第十六卷（二四張）（十八尤） 周 一 二十一侵・尋

第十七卷（九張） 二十二覃・譚 一 二十七咸・凡

己集 第十八卷（二七張）（上声） 一董・孔 一 四紙・綺

第十九卷（二張） 八語・許 一 莒

第二十卷（三張） 九夔・杜 一 鄆

（庚集） 第二十一卷（五二張） 十一齊・禰 一 三十五馬・假

第二十二卷(二張) 三十六養・蔣一五十三謙・湛
 辛集 第二十三卷(二〇張)(去声) 一送・貢一 十遇・遇
 第二十四卷(二〇張) 十二霽・衛一三十七號・暴
 第二十五卷(二八張) 三十八箇・賀一五十四闕・念
 壬集 第二十六卷(二四張)(入声) 一屋・陸一 十六屑・節
 第二十七卷(二四張) 十八藥・藥一三十二洽・郊
 癸集 第二十八卷(一八張)(覆姓) 上平・公孫一 入声・夾谷
 单边(一八・四×一二・一糧) 有界、每半張十四行、每行二十
 八字。白口、单線黒魚尾下題「甲集幾」等、下方張数。下辺間々
 工名一字を存す(「昇」以下)。

巻尾題「新刊京本排韻増廣事類氏族大全綱目卷之二終」等。

巻首題著に名を標する周尚文は、本編戊集第十六卷、周氏
 「皇明人文」中に録して、次のように伝えている。

周尚文、字載道、號中洲、江西安仁人。早歲穎悟異常、聰
 明特達、閩里奇之。暨因屢試不達、遂忿志遊閩書市、日以
 著述爲事。考古索今、比時聲譽益隆、四方同儕者咸曰、嘉
 惠來學、先生之功大矣。

これを要するに、郷試に達せず書林に活路を求めた編集者の一
 人であろう。前出の徐序に見え「皇明人文」を作ったとされる

中洲子は、この周尚文のことと思われるが、そうすると右の小
 伝は周氏自らが記したということになる。本版の最大の特徴は
 この「皇明人文」を加え明人の伝を補った点にあり、題署に
 「校閲」と称するものの、周氏は校編を一手に手掛けたもので
 であろう。庠生傅起巖の伝は詳かでない。なお旧編の十集の組織
 を残しつつ、それぞれ一乃至四卷に分け二十八卷としたのは、
 本版に端を発することのようである。旧編の部分にはほとんど
 手をつけておらず、「元」刊十六行本の款式に基づいている。
 ただ実際上どの一版に基づいたかは、これを明らかにすること
 ができなかった。

〈台北・国家図書館 二〇五・一四、〇三〇四四〉 一二冊

清劉文燿旧蔵

新補淡青地淡茶色気泡文漉目表紙(二八・二×一六・八糧)
 (旧藍表紙上に貼附)。擬康熙綴、素絹包角。天地截断、金鏤玉
 装。前副葉、「建業劉氏幼丹甫珍藏〓明版氏族大全」と書し、
 「珍」字に重ね方形陰刻「劉氏〓文燿」朱印影(清劉文燿所用)
 を存する旧時の補葉を差夾む。徐序、綱目の後、本文に入る。
 第七至八卷、第二十一至二十八卷を每冊二卷とする他は、每冊

三卷。第十卷第二、一張、第二十二卷第二十、十九張錯綴。欄上行間に墨補注、朱鈔補を施す。

この本の書影は、前出の国家図書館ウェブサイトに内「古籍影像検索系統」にて閲覧できる。

〈中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館 989・576〉 十二冊

新補香色表紙（二五・六×一六・三種）、後補藍色絹表紙。淡青包角。襪紙改装、破損部補紙。前後副葉。徐序、綱目を存し

本文に入る。第七至九卷、第十二至十四卷、第十五至十七卷、第二十二至二十四卷を各一冊とする他は毎冊二卷。

稀に欄上墨補注書入。巻首及び毎冊首に単辺方形陽刻「東方文化／事業總委員會所／藏圖書印」、毎冊尾に方形陰刻同文朱印影を存す。

右の他、『中国社会科学院文学研究所藏古籍善本書目』伝記

類に「〔新刻京本排韻増廣事類〕 氏族大全綱目 二十八卷／

（明）周尚文校／明初閩書林陳氏積善堂刊本 十二冊」と録す

る本（北京人文科学研究所旧蔵か）、王重民氏『美国国会図書館蔵中国善本書目』子部類書類に「新刻京本排韻増廣事類氏族

大全綱目二十八卷 十八冊」「明萬曆間刻本「十四行二十八字（19×2）」と録する本は同版か、未見。本邦には伝存が知られていない。

精刻張翰林重訂京本排韻増廣事類氏族大全二十八卷

元闕名編 明〔周尚文増〕 張溥校

明崇禎五年（一六三三）序刊（積善堂陳國旺）

この版本は前記十集二十八卷本を受け、長く行われた十集の組織を廢し、款式字様をも改めた新校本である。ただその本文は大略前本と同様であり、前本に附された「皇明人文」を引継いでいるが、この本ではその編者の名を失ない、歴々たる校者の名を押し立てたのである。

封面、単辺有界「太史張天如先生重訂／排韻古今氏族（楷體大書）／

是集原倣京本。刊行已久。茲求（摺單）張太史再參考訂。古今

備列。始末週詳。無疑不析。無美不傳。允（摺單）／百代之／芳規。長

爲千秋之金鏡。是宇宙一大奇觀也。欲譜世系之牒者。寧能已／

于斯乎。余用是重梓以公于世。（隔五）繼善堂陳玉我梓行

（小字、圈点略）二牌記。

張天如（張太史）は張溥、字天如。太倉人。崇禎元年貢生として南監に入り、同四年辛未進士、後年復社の主盟となる。繼善堂陳玉我は、前出積善堂陳崑泉と同属の後裔、名を国旺と言う。

先ず管序（五張）、首題「重刻官板氏族大全序」、次行より諱字単擡にて本文（一上略）前因閩省倭寇爲梗坊間舊板無存書林陳氏搜藏重梓以／公子世亦一片苦心之務矣（中略）／皆／崇禎壬申歲夏月年弟管正傳／撰于繼善堂、次行より方形陰刻「管印／正傳」單辺方形陽刻「辛未／聯捷」印影模刻。六行十二字。管正伝、字元心、徳園と号す。長洲の人。崇禎四年辛未進士。前出の張溥と同年である。この序に抛ると、該本は万曆頃刊行と思われる前掲の「明」刊本を継承する。

次で目錄（一二張）、首題「精刻張翰林重訂京本排韻增廣事類氏族大全目錄」、次行低二格に声目、次行低三格に韻目を標し、次行より毎行六段に姓氏、声類（小字、双行）、貫籍を列す。

卷首題「精刻張翰林重訂京本排韻增廣事類氏族大全卷之一（至二十八）／（以下低二六格）太倉 天如 張 溥 訂正／潭陽 玉我 陳國旺 繡梓」、次行低四格に「一東」等と韻目、次行低二格に「馮 宮音 始平」等と姓氏、声類、貫籍を標し、同行下に

附注（小字、双行）、次行低四格に「能斷」等と章目を標し、次行より本文「馮簡子」以下。首行単擡、毎章改行。末尾に「左襄三十二年（小字）」等と引書目を附す（間々欠く）。さらに行を接し、低三格に「女徳婚姻」と標して次行より章目本文を連ね、後に圈発下に簡略の編を列す。末尾にまた行を接し、低三格に「皇明人文」と標し、次行より章目本文を増入す。全編左の如し。

第一卷（二五張）	（上平声）	一東・馮	風
第二卷（一四張）		二冬・龍	四江・雙
第三卷（二四張）		五支・支	九魚・諸
第四卷（三五張）		十虞・虞	爰
第五卷（三五張）		十二齊・齊	十七眞・郇
第六卷（二八張）		二十一文・文	二十二元・宛
第七卷（二四張）		二十五寒・寒	二十七刪・環
第八卷（二八張）	（下平声）	一先・田	五爰・茅
第九卷（一九張）		六豪・陶	勞
第十卷（二七張）		七歌・羅	九麻・余
第十一卷（三五張）		十陽・陽	王
第十二卷（二九張）		黃	姜
第十三卷（二二張）		梁	羌

- 第十四卷 (二二張) 十二庚・程―十五青・冷
 第十五卷 (一八張) (十六蒸) 滕―弘
 第十六卷 (三二張) (十八尤) 周―二十一侵・尋
 第十七卷 (二一張) 二十二覃・譚―二十七咸・凡
 第十八卷 (三四張) (上声) 一董・孔―四紙・綺
 第十九卷 (二一張) 八語・許―莒
 第二十卷 (一六張) 九夔・杜―鄒
 第二十一卷 (三四張) 十一齊・欄―三十五馬・假
 第二十二卷 (二五張) 三十六養・蔣―五十三謙・湛
 第二十三卷 (二六張) (去声) 一送・貢―十遇・遇
 第二十四卷 (二六張) 十二霽・衛―三十七號・暴
 第二十五卷 (三六張) 三十八箇・賀―五十四闕・念
 第二十六卷 (三〇張) (入声) 一屋・陸―十六屑・節
 第二十七卷 (三〇張) 十八藥・藥―三十二洽・郊
 第二十八卷 (二二張) (覆姓) 上平・公孫―入声・夾谷
 单辺 (二二・五×一三・八糰) 有界、每半張十一行、毎行二十
 九字、方刻体。白口、上辺題「官板排韻氏族」、单線黒魚尾下
 標「幾卷」、下方張數。
- 卷尾題「精刻京本排韻增廣事類氏族大全幾卷終」。
- 本文末尾より一行を隔し低一格に「(上略) 今後重幣購求／翰
 林張太史照依原本再詳搜集／(總單) 當代群書稽考事實逐韻增入
 訂正無訛誠譜族者之要書也爰是本坊繙／刊廣布天下書旅須認書
 林積善堂爲記／(低格) 潭陽陳國旺玉我氏謹白」告文。
 ここでは前本の徐序の文言を用いつつ中洲子の名は出さず、
 張溥が増訂したように記しているが、もとより実態に合わない。
- 〈台北・国家図書館 二〇五・一四／〇三〇四五〉 合六冊
 清呉引孫旧蔵
- 後補香色表紙(二六・八×一六・五糰)、首冊のみ香色旧表紙
 をも存す。改糸、破損修補。前副葉。封面を欠く。管序首題下
 に「六本一函／三元」墨書、末葉後半欠。次で目録を存し、本
 文に入る。第十一至十四、二十五至二十八巻を各一冊とする他
 は每冊五巻。
- 每冊首に单辺方形陽刻「眞州呉氏／有福讀／書堂藏書」朱印影
 (清呉引孫所用) を存す。
- この本の書影(第一巻首第一張後半)も、前出の国家図書館
 ウェブサイト内「古籍影像検索系統」にて閲覧できる。

〈国立公文書館旧内閣文庫 楓山官庫旧蔵書 史七四・二〉八冊

香色表紙(二七・〇×一六・六糎) 左肩黄檗染題簽を後補し「排韻氏族大全へ幾之幾」と書す。改糸。封面、白紙淡墨印、左方に単辺方形陽刻「陳氏／積善堂／□記」朱印影を存す。管序、目録を存し、本文に入る。第九至十一、十六至十八、二十三至二十五、二十六至二十八巻を各一冊とする他は每冊四巻。每冊首に単辺方形陽刻「秘閣／圖書／之章」朱印影を存す。

〈名古屋市蓬左文庫 一一〇・三〉

駿河御讓本

十冊

白漉目表紙(二七・五×一六・六糎) 左肩打付に「氏族大全」「幾」、又「氏族／精刻張林訂京本排韻」「六」等と書す。虫損破損修補。封面、白紙淡墨印、積善堂朱印影を存す。管序、目録を存し、本文に入る。第四至五、二十一至二十二巻を各一冊とする他は每冊三巻。淡縹色不審紙貼附。每冊首に単辺方形陽刻「御／本」朱印影を存す。

〈愛知教育大学附属図書館 名一八二一・w四〉

八冊

名古屋藩校明倫堂旧蔵

香色表紙(二七・八×一六・五糎) 左肩打付に「氏族排韻へ幾」と書す。右下方打付に別筆にて「念」と書す。改糸。破損修補。封面、白紙淡墨印、積善堂朱印影を存す。管序、目録を存し、本文に入る。第五至七、十二至十四、二十三至二十五、二十六至二十八巻を各一冊とする他は每冊四巻。

朱韻目標圈、稀に姓名合点書入。每冊首に単辺方形陽刻「翰墨齋」朱印影、方形陰刻「明倫堂圖書」朱印影、単辺方形陽刻「愛知縣第一師範學／校圖書印」、同「愛知第一師範學校／圖書之印」朱印影を存す。

〈上越市立高田図書館修道館文庫 四〇・一七九・八〉 八冊

榊原忠次旧蔵

香色表紙(二六・八×一六・二糎) 左肩打付に「排韻へ自幾至幾」と書し、直下より同朱筆にて声韻目を書す。中央に単辺方形陽刻「脩道／館印」朱印影を存す。封面、白紙印、同前積善堂朱印影を存す。管序、目録を存し、本文に入る。第五至七、八至十、二十三至二十五、二十六至二十八巻を各一冊とする他は每冊四巻。

每冊尾に双辺方形陽刻「吏部大卿忠次」、単辺円形陽刻「文／
庫」朱印影（二顆榊原忠次所用）、每冊首に単辺方形陽刻左右
龍文「高田」、表紙同朱印影（高田藩校修道館所用）を存す。

〈柳川古文書館伝習館文庫・安東家旧蔵書 安七一〉 六冊

新補海松色表紙（二五・六×一六・二糶）、改糸。次で後補淡
洪引表紙を存し、左辺打付に「氏族大全」「幾」と書す（第
二至六冊題目別手朱書）。管序、目録を存し本文に入る。第五
至九、十四至十八、十九至二十四、二十五至二十八巻を各一冊
とする他は每冊四巻。

序のみ欄上墨補注、每巻首張付に朱標点、第六冊のみ韻目朱標
圈書入。每冊首に単辺方形陽刻「傳習館／郷土文／庫之印」朱
印影を存す。

〈市立米沢図書館 米澤善本三〇〉

八冊

欠巻二十八

後補栗皮表紙（二六・二×一六・二糶）左肩題簽を貼布し「氏
族排韻へ平」等と書す。題簽下打付に冊序数、中央方簽を貼
布し韻目を書す。押し八双。五針眼、改糸。小口書「氏族大全

金（以下八音）。破損修補。封面、白紙印、同前積善堂朱印影
を存す。管序、目録（第十一至十二張欠）を存し、本文に入る。
第二十八巻を欠き、第一至四、十四至十七、十八至二十一巻を
各一冊とする他は每冊三巻。

間々朱章目標圈、堅句点、墨破損部鈔補を施す。每冊首に単辺
方形陽刻「麻谷蔵書（書楷）」朱印影を存す。

右の他、『中国古籍善本書目』子部類書類に同趣の版本を録
し、華東師範大学図書館、建甌県図書館の収蔵を誌す等、中国
各地に伝存するかと推量される。

前記二版のわが国への伝播について、前者「明」刊本が本邦
に稀であるのに対し、後者崇禎刊本は近世の初、わが国の大名
が書物の蒐集に努め、競って唐本を入手した頃に将来される巡
り合せとなり、数多く伝えられる結果となって顕れたと考えら
れよう。しかし根源の問題として、伝統的な版本の装いを遺す
前者に比し、明末の版刻盛行の時節に、より洗練された形で再
登場した後者としては、商品としての力量に始めから大きな違い
があったと言えようか。本文自体に大きな違いはないので、か
えて示唆的な事例であろうかと思われ、そのために本来の増

編者の名が隠れてしまったことは、後世に少なからぬ影響を及ぼした。

新編排韻増廣事類氏族大全十集増補一巻

元闕名編 闕名點 (増)明「周尚文」編

〔江戸前期〕刊 覆元和五年古活字刊本

最後に、わが国の近世期に刊行された附訓本、いわゆる和刻本について述べたい。本版は標記のように、款式字様もそのままに十三行二十四字の古活字本を覆刊し、直前に述べた明版の影響をも容れて増編の本文を附綴した上、全編に訓点を施したものである。以下古活字本に異なる点のみを挙げて、本版の大意を記す。

題簽、双辺「排韻氏族大全へ幾」、同じく集声韻目を列した目錄題簽をも存す。

封面、様式も本文も明崇禎五年序刊本に同じ、但し本文左行小字の告文に、元来の圈点に加えて附訓を施した。

先ず管序(四張)、本文様式、毎行の字数は崇禎刊本に同じ。但し毎半張七行に作り一張を減じた。附訓。

次で目録(二一張)、これも本文様式、毎行の字数は崇禎刊本に同じ。但しもと十一行に対し十二行に作り、一張を減じた。巻首以下本文は古活字本に同じ。但し首行下の集目、第二行の韻目、第三行の姓氏を双辺龜甲形の牌中に標す(韻目は陰刻)。本文に返点、連符、音訓送仮名を附す。

四周双辺(二一・三×一五・八種)無界。字款不齊、一見して活字本の影響が看取される。

本文末尾の刊記は取り去つてある。

次で増補(五二張)、首題「新編排韻増廣事類氏族大全」(格^{低三})増補皇明人文「太倉 天如 張 溥 訂正／潭陽 玉我 陳國旺 繡梓」、次行低一格に「二東(墨閉)」等韻目、次行低二格に「馮(双辺龜甲形牌記)」等と姓氏を標し、次行四格を低し「龍蟠虎踞」等と章目を標して、次行より低一格(首行^{單據})に本文「馮國用」以下。本文の末より二行を隔し、改張して陳國旺告文。次で二行を隔し尾題「排韻増補皇明人文へ終」。

この附卷は、周尚文が編集し「明」刊本の毎姓の後に「皇明人文」と標して増補した明人の小伝を、そのままの形で繼承翻刻した崇禎刊本から抄出し、一巻に纏め末尾に附したものである。この部分には同款式の底本があるわけではなく、新たに版

下を製作したと見え、款式こそ本編また古活字本のそれと同じく十三行二十四字に作るが、本編に認められた字款不齊の活字本の影響が見られず、首尾に張薄や陳國旺の名を顕して、本文低一格で毎章の首に擡頭する体式は、崇禎刊本のそれを引継いでいる。

本版の刊行時期について、版本の内部徴証に従うと、首尾の拠本である明崇禎五年（一六三三）序刊本の版行を前提とし、字様から推して江戸前期、拠本よりさほど下らない頃と推定されるのである。しかし承応二年（一六五三）刊後修本『陳眉公重訂野客叢書』末尾の広告に「排韻氏族大全（張天如）」以下五種を載せ、二行を隔し「承應二癸巳年林鍾吉旦」（以下低格）京師書坊（隔三）風月莊左衛門／尾張書坊（隔三）風月 孫助」とあって、本書には本版の他に類版も知られないことから、これが大略刊行の下限を示しているものと思われる。さらに江戸時代書林刊行の出版書籍目録類を見ると、寛文六年（一六六六）頃刊行の『和漢』書籍目録』外典類に既に「十一／冊」氏族大全」と、同十年刊『増補』書籍目録』詩集類には「十一／冊」氏族大全（天如張薄）」と見え、これまでには刊行されたと思われる。後年には正徳五年（一七一六）修刻の

『増益』書籍目録大全』まで「十一／風月」氏族排韻（シソクハキイン）（張天如作 廿五匁）」等と見えている。なお先の広告に承応頃風月堂蔵版のことが知られたが、「風月」の名は元禄九年（一六九六）刊『増益』書籍目録大全』以降にも「十二／風月清」排韻大全（ハキイン）（天如張薄）」等と見える。風月堂のいずれの者が関わったか、また刊刻者か、求板者か不明。再考を期したい。

本版の本文は、古活字本までに重層した本文の劣化と、同本に於ける若干の校改をそのまま承けて、これに附訓した形であるが、以下に見るように、本邦に行われた本書の版本の中では、最も広い伝播を示した。

〈韓国学中央研究院蔵書閣 丁三・四六八〉

十一冊

天龍寺鹿王院 鹿島則文 李王家旧蔵

栗皮表紙（二八・二×二〇・〇糎）左肩、中央に摺り題簽、目錄題簽を貼附。右肩に小簽を貼布し「辛四十四、十四」と書す。五針眼（以下の伝本も同じ）。封面、見返し別葉の素紙後半に印刷し（以下の伝本も同じ）、同前半中央に方形陰刻「鹿王院」朱印影を存す。管序、目錄を存し本文に入る。每冊一集。

朱豎句点、欄上行間校注、稀に朱墨補注書入。目首及び每冊首に单边方形陽刻「鹿王藏書(書録)」朱印影(天龍寺鹿王院所用)、每冊首に单边円形陽刻「櫻山文庫(書録)」朱印影(鹿島則文所用)、首及び每冊首に「李王家/圖書之/章」朱印影を存す。

〈尊経閣文庫〉

十一冊

縹色艶出表紙(二七・五×一九・七糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。封面同。管序を欠き、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

〈宮内庁書陵部 二二六・三六〉

十一冊

徳山藩毛利家旧蔵

縹色艶出表紙(二八・〇×一九・五糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。封面同。管序を欠き、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

朱墨豎批点、批圈、返点補正、稀に欄上墨補注書入。每冊首に方形陰刻「徳/山」朱印影、双边方形陽刻有界「明治二十九年改濟/徳/山/毛利家藏書/第 番/共 冊」朱印影を存す。

〈弘前市立図書館 W二八二・九〉

十一冊

縹色艶出表紙(二七・五×一九・六糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。右肩打付に「漢 全一〇(「一」と重書)/第五九号」朱書、重ねて亀甲形の小簽を貼布し「漢 全一〇/第五九号」墨書。封面同。管序を欠き、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

首のみ淡紅色不審紙を貼附。每冊首に单边方形陽刻「紀徳一/字吉甫/號天臚」、同「黄/華/園」朱印影を存し、消印。每冊首に当館「明治「廿九」年「十」月/「工藤日諒君」寄贈」受入印(「」内墨書)を存す。

〈愛知大学附属図書館簡齋文庫 一三三三〉

十一冊

樋口銅牛旧蔵

縹色艶出表紙(二七・二×一九・三糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

每冊首に双边方形陽刻「常高寺(櫛)」、尾に单边方形陽刻同文朱印影、每冊首に「筑後遊士/得川東涯」朱印影(樋口銅牛所用)を存す。

〈東京都立中央図書館井上文庫 一七八七・一〉

十一冊

縹色艶出表紙(二七・三×一九・三糎)左肩、中央に摺り題簽、

目録題簽を貼附。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

朱合標堅批句点、標批点、音訓送仮名補正、行間補注校改、同墨欄上標補注(仄声以下は稀)、別朱欄上標圈、堅点書入。縹色或いは素不審紙。每冊首に単辺方形陽刻「井上異軒／藏書之印(書)」朱印影を存す。

〈大阪天満宮御文庫 子二一・一三〉

十一冊

近藤南洲旧蔵

縹色艶出表紙(二七・〇×一九・五糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。首冊のみ左下方打付に「秋」と書す。每冊右肩藏書票貼附。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

極稀に行間墨校改を加う。每冊首に単辺亜形陽刻「梵字」山「朱印影、同方形「近藤／氏藏」、同「猶興書／院圖書」朱印影(近藤南洲旧蔵)を存す。

〈静嘉堂文庫 四二・一〇〉

十一冊

中村敬宇旧蔵

縹色艶出表紙(二六・八×一九・一糎)左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。左下方亀甲形小簽を貼布し「太」と書す。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

稀に朱堅批点書入。每冊首に方形陰刻「度會／忠鼎」朱印影、每冊首に単辺方形陽刻「中邨敬宇／藏書之記」朱印影を存す。

〈九州大学附属図書館六本松分館 2022・H一五・一〉合六冊

福岡高等学校旧蔵

後補黄檗染表紙(二七・一×一八・八糎)左肩打付に「排韵〈幾之幾〉」と、右肩より韻目を書す。又別手にて左上辺打付に「排韵」と細書す。右肩に亀甲形小簽を貼布し「辰」と書す。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。甲集を二冊とする他、每冊二集。

稀に朱句点。淡茶色或いは淡紅色不審紙。第三冊尾に「享保五子年 龍峯寺」墨識。每冊尾に方形陰刻不明朱印影(墨滅)、每冊首に単辺方形陽刻「福岡高／等學校／圖書印」、每冊尾に単辺円形陽刻二層「(外)★福岡高等學校(内)圖書」朱印影

を存す。毎冊首に大正十五年鹿田静七納、受入印影を存す。

〈金刀比羅宮図書館 七〇・三三〉

合六冊

〈山口大学附属図書館棲息堂文庫 M282.03-S21/A1-11〉十一冊
徳山藩毛利家旧蔵

縹色艶出表紙(二七・〇×一九・二糎)左肩、中央に摺り題簽、
目録題簽を貼附、第二、三冊題簽錯貼。封面同、前見返し位。

管序、目録を存し、本文に入る。毎冊一集。

〈久留米市立中央図書館 漢(和)・史・四七〉

十一冊

毎冊首に方形陰刻「惠藩ノ臧書」一明治二十九年改濟ノ徳ノ山
ノ毛利家藏書ノ第「千八十四」番ノ共「十二」冊」朱印影
〔「内墨書」を存す。毎冊前見返しに毛利就挙寄贈受入印影
を存す。

新補洪引刷目包背表紙(二七・〇×一八・九糎)左肩打付に
「排韻古今氏族 幾」と書す。右肩に三原文庫(三原顕蔵、良
太郎原蔵)藏書票貼附。次で後補淡洪引表紙、左肩、中央に原
摺り題簽、目録題簽を貼附(或いは題簽剥落痕に「排韻古今氏
族 幾」と書す)、右肩に三原文庫藏書票貼附。封面同。管序、
目録を存し、本文に入る。毎冊一集。

〈住吉大社御文庫 四二・七〉

十一冊

淡洪引表紙(二七・五×一九・一糎)左肩、中央に摺り題簽、
目録題簽を貼附、右肩鶴松文摺り「住吉文庫」藏書票、又朱摺
り藏書票貼附。首冊のみ右肩に方簽を貼布し单边方形陽刻「津
國ノ住吉ノ文庫」朱印影を存し、重ねて方簽を貼り「丑十三ノ
共拾巻」と朱書す。押し八双。封面同。管序を欠き、目録を存
し、本文に入る。毎冊一集。

朱筆にて附訓補正を施す。

〈東京都立中央図書館諸橋文庫 九二二 MW 一五六・九〉十一冊
新補黄色布目小葵文空押艶出表紙(二七・四×一九・九糎)左
肩貼附旧題簽、同工同文覆版摺り。中央同目録題簽貼附。浅葱
色包角。四針眼、旧五針眼を改装。虫損修補。封面同、前見返

し位。管序、目録を存し、本文に入る。每冊一集。

每冊首に紅葉形不朱印影、每冊首に同「隆源／實空」、每冊尾に双边方形陽刻「廬□實空（書檮）」（刪去）朱印影を存す。

〈早稲田大学図書館 又八・四九六一〉

合十冊

緑色艶出表紙（二五・七×一八・七糎）左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。每冊後表紙中央に「樂天堂 佐藤了翁（低七格）」

藏書」墨識。小口書十一冊分。封面同、前見返し位。管序、目録を存し、本文に入る。壬至癸集を一冊とする他は每冊一集。

丙集第二張欠

淡茶色不審紙。首に「■」（墨滅）山常住」墨識。每旧冊首尾に单边方形陽刻「天真堂／圖書」朱印影、每冊首に「生樂舍」朱印影、单边方形陽刻「日本イヌ／ラム協會／圖書之印」朱印影を存す。

〈国会図書館 一一八・七九〉

合六冊

新補洪引「帝國圖書館藏」打出表紙（二七・一×一九・一糎）左肩に双边摺り枠題簽を貼布し「排韻氏族大全 幾」と書す。

次で後補洪引市松格子文空押布目表紙、左肩、中央に摺り題簽、

目録題簽を貼附。また東京図書館藏書票貼附。小口書「排韻氏族大全何集」十一冊分。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。もと每冊一集、現在は甲集を一冊とする他、每冊二集。

序題下「品」墨書。首のみ素附箋。每旧冊首に单边方形陽刻「宮内省／圖書印」朱印影、双边円形陽刻「TOKIO LIBRARY

（每字改行）東京書籍館（下略）」朱印影を存す。

〈無窮会平沼文庫〉

十冊

緑色艶出表紙（二七・三×一九・三糎）左肩、中央に摺り題簽、目録題簽を貼附。簽上題下に集目を書し、円形二層（層外層）「MASUDA（刻陰）」（内層）有泉（每字）増／田／文／庫（掛檮）」朱印影を存す。虫損修補。封面同。管序、目録を存し、本文に入る。壬至癸集を一冊とする他は每冊一集。

稀に墨筆にて批点、欄上墨標補注、破損部鈔補、朱批点、欄上校改を加う。増補第八、九張間に剪紙を差夾み「摺按（中略）」

（低）明治三十一年七月十四日夜録」評注並に識語墨書。

每冊首に表紙同印影、单边方形陽刻「無窮會／神習文庫」朱印影を存す。

〈東京大学東洋文化研究所大本文庫 史部伝記類五七〉 十一冊

安西雲煙旧藏

縹色艶出表紙(二・六・六×一八・八糎) 左肩、中央に摺り題簽、

目錄題簽を貼附。四針眼。每冊前見返し中央に単辺方形陽刻有

界〔上〕(毎字改行) 子孫永保〔下〕(履) 共十一卷ノ雲煙家ノ藏書記ノ

〔楷書〕藍印影(安西雲煙所用)を存し、右辺に「小川清七郎主

ノ十一(拾毫)冊之内」墨識。首冊前見返しに「民国拾二年七

月一日ノ於北京琉璃廠」墨識。封面同。管序、目錄を存し、本

文に入る。先ず増補、次で甲至癸集。每冊一集。

稀に朱豎批句点、句圈書入。每冊首に方形陰刻「塾ノ善」朱印

影、首尾冊の首尾に方形陰刻「貴數ノ卷殘ノ書」朱印影を存す。

〈東北大学附属図書館狩野文庫 狩三・六九五九〉 五冊

渡部邁旧藏

後補縹色雷文繫桐花唐草文空押艶出表紙(二・五・九×一八・三

糎)。梨色包角。改糸。天地截断。封面同、扉の位。管序、目

録を存し、本文に入る。先ず増補、次で甲至癸集。辛至癸集を

一冊とする他は每冊二集。

間々欄上墨音注書入。下辺附箋。每冊首に單辺方形陽刻「下塾

國ノ渡部氏ノ藏書印」朱印影(渡部邁所用)、目首に双辺同
「荒井泰治氏ノ寄附金ヲノ以テ購入セル文學博士ノ狩野亨吉氏
舊藏書」朱印影を存す。

右の外、「北京大学図書館藏古籍善本書目」子部類書類に録
する同名の「日本刻本 十一冊」、「中国館藏和刻本漢籍書目」
子部類書類に録する同名「日本刻本」(北京図書館、南京図書
館、大連図書館藏)、王重民氏「美国国会図書館藏中国善本書
目」子部類書類に録する「(十一冊 二函)日本翻明本(十三
行二十四字)」、「ハーバード燕京図書館和書目録」漢籍編、子
部類書類に録する「寛文ころ刊(2032)」「江戸初期刊(2033)」
は、みな十集に増補一卷を附する由であるから、本稿に言う
「江戸前期」刊本である可能性が高い。これまた調査の機を俟
ちたい。

最後に上記諸版本の展開について再述すると、元の世に無名
の編者によつて成された本書「氏族大全」は、始めにやや粗雑
の版刻と見なすべき「元」刊十集十六行本が行われ、この本を
起点として元末明初に十六、二十、十七行の覆刻、翻刻が相次

いだ。このうちの二十行本は十巻に纏められ、宋末以来流行していた韻書類書の款式を模し、大小の字を併せ、より洗練された形を採って玉融書堂から刊行された。また明永楽十七年に日新書堂からも翻刻が為されたが、こちらは半張に一行を増すのみ、かえって原刻の様式を残し、後世屢々元版に偽装された。

もとの「元」刊本は、わが国の南北朝に将来されて本邦独自の覆版を生み、その本文は未校のまま刻され、至る所に不都合を生じていたのであるが、禅林に受容者を迎え稠密な校読を経て、室町末近世初の交に至るまで盛んに流通し、江戸初に及び十三行の古活字本として再生された。元々本書は通俗的編集に係るため、体例の不備や本文の劣化が災いして中国にはあまり震わず、明の半ばまでにその流布は減少に転じたと思しいが、かえって同時代の本邦に弘通し、常時作文の用意に供された格好である。ただ明代後葉に至り、編集事業に活路を求めた周尚文と書林陳国旺が手を結び、旧編を二十八巻に装い明人の伝を補った増編本が刊行されると、ようやく需要を回復し、款式字様を改め、崇禎の初に又一版を生じた。この版本は、本邦の江戸初に当たって数多く舶載され、大名の唐本蒐集にも与って各地に収蔵された。そのような事情から、江戸前期、整版附訓本により

漢籍の普及が大規模に抜がった頃、本書には室町の遺風を体する古活字本と、新增の崇禎刊本とが並存していたため、前者を主に後者を折衷した「江戸前期」刊本が形成され、これは江戸時代を通じて印行され、附訓の流布本として漢学者の参考に供された。

右の関係を図示すると、以下のように表されよう。

○諸本

↓十集十六行本

↓十巻二十行本

↓十集十七行本

↓十集二十八巻十四行増編本↓二十八巻十一行増編本

↓十集十三行本

○諸版

(十集十六行本)

「元」刊本↓「元末」刊本

↓(十巻二十行本)「元末」刊本

↓「明初」刊本

↓「南北朝」刊本↓(十集十三行本)

↓〔十集十七行本〕 明永樂十七年刊本

↓〔十集二十八卷十四行增編本〕

〔十集二十八卷十四行增編本〕

〔明〕刊本↓〔二十八卷十一行增編本〕 明崇禎五年序刊本

〔十集十三行本〕

元和五年古活字刊本↓〔江戸前期〕刊増補附訓本

以上、知見の伝本に従い『氏族大全』の版本とその受容について記述した。但し現在まで、中国大陸や欧米に伝来の版本について情報を欠いているため、補い直すべき点の生ずる可能性を含んでいる。本稿の整理を仮設として、さらなる伝本の著録を加え、後日の増修を期したい。

〔注〕

(1) 明代の私家蔵書目を見ると、『晁氏宝文堂書目』巻下・姓氏に

「氏族大全〈四本〉」と、『近古堂書目』巻上・譜牒類に「氏族大

全綱目」と、『濮陽蒲汀李先生家蔵目録』東間朝東三櫃二層に

「氏族大全二二本」と、同西間朝西二櫃三層に「氏族大全〈四本〉

と、『脈望館書目』列字號・子・類書に「氏族大全十本 又一本

〈不全只有聲〉」と、『徐氏家蔵書目』巻二・姓氏に「氏族大全二十八卷」と見える。

(2) 『建炎以来繫年要録』巻七、丁巳（紹興七年）条に「趙明誠知

江寧府兼江東經制副使。明誠、挺之子也」とあるのを見ると、やはり葉氏の説が正しいようである。

(3) 『楚辭』巻六「卜居」に「夫尺有所短、寸有所長」と、王逸注

に「莊子云、梁麗可以充城而不可以窒穴、尺有所短也。騏驎驂驪

一日而馳千里、捕鼠不如狸狔、寸有所長也」とある。

(4) 朝鮮朝に於ける『氏族大全』の受容については、中国以上に稀

ではなかったかと思われ、唯一正祖時代の購進書を著録した『内

閣訪書録』史部に「新編排韻廣事類氏族大全十冊」の著録が見ら

れ「甲至癸集爲十集」と記す他はその跡を絶っており、本書の伝

存は皆無ではなからうが、相当に微弱ではなかったかと思われる。

また現在諸方面の書目に徴しても、朝鮮に於ける複製の事蹟を見

ないため、本稿の研究対象とはしなかった。この点についてはな

お識者の教示を乞いたい。

(5) 芳賀幸四郎氏『東山文化の研究』（昭和二十年、河出書房）八

二頁、また『中世禅林の学問及び文学に関する研究』（昭和三十

一年、日本学術振興会）三三〇頁に、『臥雲日件録』『蕉雨夜話』

『幻雲文稿』に於ける本書（排韻）への言及について紹介がある。

- (6) 当該の早稲田大学図書館蔵本について、『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』史部伝記類（九三頁）に「新編排韻増廣事類氏族大全へ一〇集／明張溥校 五冊 和中」と著録するが、後出の明版以降に見える張溥の名は本版と無関係と思われ、また表紙その他、和装ではあるが、中身は唐本と見なされる。

- (7) 危素の官歴については、宋濂「故翰林侍講學士中順大夫知制誥同脩國史危公新墓碑銘」（『宋學士文集』卷五十九）に「公自至正二年用大臣交薦入經筵爲檢討（中略）二十年拜通奉大夫中書參知政事同知經筵事提調四方獻言詳定使司、後四年階陞資政大夫、俄除翰林學士承旨榮祿大夫知制誥兼脩國史」とある。

- (8) 字音の声類を、五音の名を以て呼称する方法は、例えば司馬光の撰と伝える『切韻指掌圖』に見え、韻書によって細部の相違はあるものの、宋元の頃にある程度普及していた。

- (9) 『古今韻會舉要』は見かけ上、一〇七平水韻のもとに同音字を集め、声類の順に配列する形式を採っていて、韻中同音字の声母は、圈發を冠して示された先頭の字目に附し、反切の後に注記されている。同書は「角徵羽宮商」の五音名の他に「半徵商」「半

商徵」を増益した七音を用い、さらに「清」「次清」「濁」「次濁」の四等（実際は「次清次」「次濁次」を増益）と組合せて類別を標記している。今、声類の表示については、清濁の等位を除き七音のみを示した。七音は次のような音を示すという。

角—牙音 半徵商—來母
徵—舌音 半商徵—日母
宮—唇音
商—齒音
羽—喉音

同書はさらに「中原雅声」に基づいて「音與何同」等の注記を頻用し、旧来の韻目を超えて、音韻の実態を標記したものとされる。以上の理解は花登正宏氏『古今韻會舉要研究—中国近世音韻史の側面—』（平成九年、汲古書院）の恩恵に拠る。前掲声類の音価対照等についてはなお同書に拠られたい。また表中では前記の理解に基づき、他の字目下の声類注記を参照して得られた音名を示している場合もあるが、逐一断っていない。

- (10) 二〇〇四年九月の訪書時、該本は第五、六巻を欠く五冊本の形で提供された。しかし『国立故宫博物院善本旧籍総目』、阿部隆一氏『中国訪書志』の著録や、マイクロフィルムによる該本の

影像を見る限り、元來は共六冊の完本と思われる。本稿の著録は、私に儲けた書誌の他に、右の資料を参考とした。

(11) 該本について『国立北平図書館善本書目』子部類書類に「新編

排韻增廣事類氏族大全二十二卷（元刻本）／存六卷（二五至七）」と著録するが、同版本は全十巻から成り、巻数を二十二とするのは誤りと思われる。これは全二十二巻に分かつ『四庫全書』本を参照したためであるが、現在までそのような版本の伝存を確認し

ていない。『四庫全書』本は書前提要に録する通り二十二巻で（文淵閣本『欽定四庫全書繪目』は「浙江巡撫探進本」）例以十千

分集、每一集爲二卷」等と録して「二十巻」に作る）、書前提要中に「相其板式、亦建陽麻沙所刊、乃當時書肆本也」として、二十二巻本の刊行を記しており、また『嘉業堂藏書志』巻二・史

部伝記類に「氏族大全二十二卷（舊鈔本）」を録して「元人建陽書鋪本」と記しているが（繆荃孫稿）、少なくともこの北平図書館本の巻立は『四庫全書』とは異なり、同版の完本によって十巻と判明する。

(12) 日新書堂について録する既成の『明代版刻繪録』、『福建古代刻書』等には当該版本の著録を欠く。本版牌記の年代は明初永樂年間であり、元末から明宣徳の間に断絶していた日新書堂開版書の、

空白を埋める意味でも貴重である。

(13) 静嘉堂文庫藏本について、後出『柏克萊加州大学東亜図書館

文古籍善本書志』子部類書類（四五〇番）に本版を著録し、『静

嘉堂文庫宋元版図録』輯録の元刻本がこの永樂版と同版であること、既に指摘がある。

(14) 故宮博物院藏本について、阿部志に静嘉堂文庫藏本と同版である由、既に著録がある。

(15) これについても阿部志及び『柏克萊書志』に指摘あり。

(16) このうちの北京大學図書館藏本については『木犀軒藏書題記及書録』書録編・子部類書類に著録があり、存甲至戊集の残本である由。

(17) 本版の室町期に於ける受容について、『蔭涼軒日録』延徳四年（二四九二）七月二十一日条に「春英和尚來面之。賀桂公轉位。

以排韻和本謝之」と記し、相国寺の亀泉集証から春英寿芳に贈られた「排韻和本」とは本版を指すものと思われ、その流通の一齣を止めている。

(18) 謝水順、李珽両氏『福建古代刻書』（一九九七年、福建人民出版社）参照。

(19) 王重民氏『中国善本書提要』に米国議会図書館収蔵の同種本を

録してこの丁氏の説を引き、さらに「此本徐序闕後半、且無木記、蓋爲書買抽去、以僞稱元本」と言っており、これにもやはり牌記等を欠くことを述べている。

(20) この点、既に注(19) 王氏提要に「偶繹此本人文内、有周尚文小傳、再檢積善堂本亦有之、繹其語氣似是自傳。茲彙録於後、爲讀者知人者尋覽焉」として引用があり、さらに考証を進めて次のように記す。

攷同治『上饒縣志・選舉表』、有周尚文、稱「正德間貢成均、官貴州通判」、時代相値、疑即其人。然『義行傳』引『高洲周氏族譜』云「尚文別號雙溪、少穎敏、以明經舉進士、官国子監祭酒」、則與『自傳』「屢試不達」之言不合。觀選舉表不著其舉進士之年、恐『族譜』有溢美。然遊食書林之後、稍獲聲譽、得儕下僚、如『縣志』所稱官貴州通判之類、則非不可能之事也。

〔附記〕

本稿は平成十七年度日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究(B)

「日本漢籍の本文形成に関する研究―五山版・古活字版を中心として―」

(課題番号一七七二〇三五)による成果の一部である。

目板

新編排韻增廣事類氏族大全綱目

六甲集 上平聲

一東

馮熊童洪戎翁种終駿
豐宮蒙東通紅公克融
風 弓

二冬

龍鍾宗封龔谷

四江

江龐逢雙

[元]刊 16行本 首
早稲田大学図書館蔵

新編排韻曲 廣事類氏卷大全

甲集

馮

官音 始平

周文王第十五子畢公高之後
周文王之孫康叔之孫也

能斷

馮簡子鄭大夫能斷大事鄭國將有諸侯之事與裨諶乘以適野使謀可
否而告簡子使斷之左襄二十一年

世宦

馮諼為秦上黨太守馮去疾為秦丞相馮無擇為秦將馮放為魏騎將皆
事之後見史記

彈鋏

馮驩躡橋見齊孟嘗君置傳舍十日君問傳舍長曰客何為曰馮先生甚
貧猶有一劍且又崩絃彈其劍而歌曰長鋏歸來乎食無魚遷之幸舍食
魚有魚矣又彈劍而歌曰長鋏歸來乎出無輿遷之代舍出有輿矣又彈
劍而歌曰長鋏歸來乎無以為家孟嘗君不悅後孟嘗君廢諸客皆去獨
賴馮驩得復其位孟嘗君傳

白首郎官



[元末] 刊 20行本 封面
故宫博物院藏

新編排韻增廣事類氏族大全綱目

卷之二

上平聲

一東

宮馮始平 明熊江陵 徵童鴈門 明洪徽煌 商戎江陵

明翁燕管 商种河南 商終南陽 商駿鄭國 宮豐京兆

宮豐括陽 商宮太原 宮蒙安定 徵東平原 徵通西河

明紅平昌 商公括陽 商充贊皇 明融南唐 商弓太原

宮風

一冬

[元末] 刊 20行本 首
故宮博物院藏

新編排韻增廣事類彙編卷之十一

一東

馮周文王字十五子畢公高之

能斷馮簡子郭大夫能斷大事鄭國將有疾之事與裨甚

彈鋏馮驩彈劍而歌曰長鋏歸來乎無以

君問傅舍長曰容何為曰馮先生甚貧猶有一劍耳又聊侯彈其劍而

歸來乎出無與遷之代舍出有襪矣又彈劍而歌曰長鋏歸來乎無以

為家孟嘗君不悅後孟嘗君廢諸客皆去獨賴馮驩得復其位孟嘗君

白首郎官馮唐曰首為郎漢武帝求賢與公卿舉唐時年

十餘不能官以建節封侯馮奉世字子明在三十春秋涉大義

諸國各陳其圖厥高聲其德威振西域得名馬家龍而還元帝

別有金吾後賜爵侯內侯

藍川家藏

[元末]刊 20行本 卷首 故宮博物院藏

新編排韻增廣事類氏族大全綱目

六甲集

上平聲

一東

馮始平 熊江陵 童鴈門 洪燉煌 戎江陵

翁葦管 种河南 終南陽 駿鄭國 豐京兆

豐括陽 宮太原 蒙安六 東平原 通西河

紅平昌 公括陽 充贊皇 融南唐 弓太原

風

一冬

龍武陵 鍾穎川 宗京兆 封渤海 龔武陵



明永樂17年刊 17行本 首
天理圖書館藏

氏族目錄

日	新書堂	新	栳
永	樂	己	亥
		孟	春

索盧	屈突	萬俟	穀梁
百里	內河	陵蘭	魯郡
息夫	羽達	孤高	叔孫
黑齒	突	平	郡
交谷	若	宮	解
	干	禿	律
	拓	髮	門
	按	漆	斛
	川	雕	斯
	乞	尉	陵
	伏	遲	武
	西	原	僕
		大	固
		同	同

明永樂17年刊 17行本 目尾
天理圖書館藏

新編排韻增廣事類氏族大全

甲集

東

馮

宮音 拾平

周文王第十五子畢公高之後
伊萬之孫食采於馮城因氏焉

能斷

馮簡子鄭大夫能斷大事鄭國將有諸侯之事與裨謀乘以適野使謀可
否而告簡子使斷之左襄二十一年

世宦

馮亭為秦上黨太守馮去疾為秦丞相馮無擇為秦將馮敬為魏騎將皆
亭之後見史記

彈劍

馮驩躡橋見齊孟嘗君置傳舍十日君問傳舍長曰客何為曰馮先生甚
貧猶有一劍耳又胸縱彈其劍而歌曰長鋏歸來乎食無魚遷之幸舍食
魚有魚矣又彈劍而歌曰長鋏歸來乎出無輿遷之代舍出有輿矣又彈
劍而歌曰長鋏歸來乎無以為家孟嘗君不悅後孟嘗君廢諸客皆去獨
賴馮驩得復其位孟嘗君傳

白首郎官

馮唐白首為郎漢文帝董過郎署與論將帥拜為車騎都尉 子遂字子

驩
時言及

日
一
上
下
同
書

新編排韻增廣事類抵牾大全綱目
大甲集

一東

馮熊童洪戎翁种終驥豐
豐宮蒙東通紅公克融
風

一冬

龍鍾宗封龔容

四江

江寵逢雙

[南北朝] 刊 16行本 首
国立公文書館旧内閣文庫藏



新編排韻增廣事類氏族大全

甲集

馮

官音

送平

開敵注第十五子觀敵鳴之聲

能斷

馮簡子鄭大夫能斷大事鄭國將有諸侯之事與禪謀策以適野使謀可
否而告簡子使斷之左襄三十一年

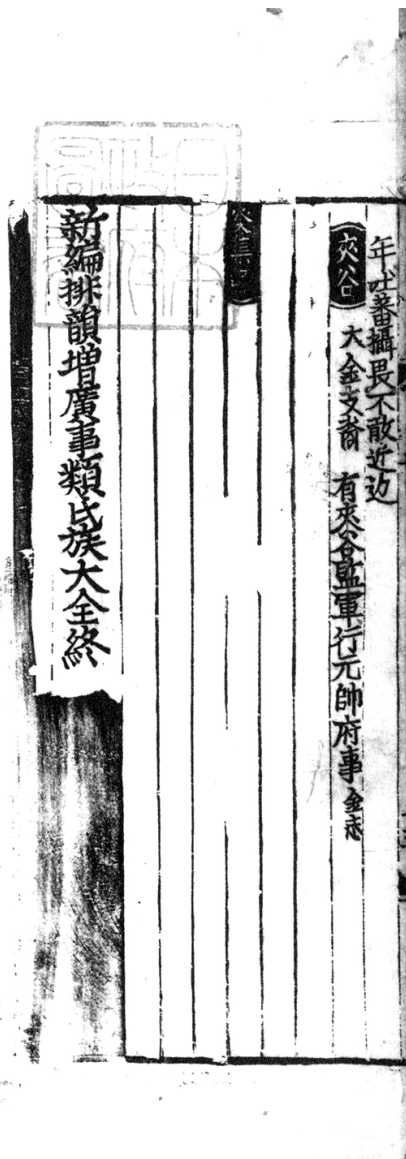
世宦

馮亭為秦上黨太守馮左疾為秦丞相馮無擇為秦將馮敬為魏騎將皆
亭之後見史記

彈劍

馮驩躡橋負齊孟嘗君買傳舍十日君問傳舍長曰客何為曰馮先生甚
貧猶有一劍耳又蒯絃彈其劍而歌曰長鋏歸來乎食無魚饑之幸舍食
魚有魚矣又彈劍而歌曰長鋏歸來乎出無興子之代舍出有興矣又彈
劍而歌曰長鋏歸來乎無以為家孟嘗君不悅後孟嘗君廢館客比自去獨
賴馮驩得復其位孟嘗君傳

白首郎官



[南北朝] 刊 16行本 尾
国立公文書館旧内閣文庫蔵

新編排韻增廣事類氏族大全

甲集

馮

馮

宮音

給平

周文王第十五子畢公高之後畢當之孫食采於馮城因氏焉

能斷

馮簡子鄭大夫能斷大事鄭國將有諸侯之事與裨謀乘以適野使謀可否而告簡子使斷之左襄三十一年

世宦

馮亭為秦上黨太守馮去疾為秦丞相馮無擇為秦將馮敬為魏騎將皆亭之後見史記

彈鋏

馮驩躡屣見齊孟嘗君置傳舍十日君問傳舍長曰客何為曰馮先生甚貧猶有一劍耳又蒯緌彈其劍而歌曰長鋏歸來乎食無魚遷之幸舍食魚有魚矣又彈劍而歌曰長鋏歸來乎出

避衆畏其口見之側目

黑齒

○黑齒常之百濟人驍毅有謀畧唐調露中拜河源道經畧大
使涖軍已年吐蕃攝畏不敢近邊

夾谷

大金支裔 有夾谷監軍行元帥府事 金志

癸集終

新編排韻增廣事類氏族大全終

元和五祀年九月日

元和5年刊 古活字13行本 尾
陽明文庫藏